



# ICOM 国際委員会年次大会報告書

2018年度

ICOM 日本委員会



# 目 次

I. 2018年度ICOM国際委員会年次大会開催一覧	3
II. ICOM国際委員会の紹介	7
III. ICOM国際委員会年次大会参加報告書	15
2. CAMOC 都市博物館のコレクション・活動国際委員会	16
4. CIDOC ドキュメンテーション国際委員会	18
5. CIMCIM 楽器の博物館・コレクション国際委員会	20
6. CIMUSET 科学技術の博物館・コレクション国際委員会	22
7. CIPEG エジプト学国際委員会	24
8. COMCOLコレクティング国際委員会	26
9. COSTUM 衣装の博物館・コレクション国際委員会	28
10. DEMHIST 歴史的建築物の博物館国際委員会	32
11. GLASS ガラスの博物館・コレクション国際委員会	34
12. ICAMT 建築・博物館技術国際委員会	36
13. ICDAD 装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会	38
14. ICEE 展示・交流国際委員会	40
15. ICFA 美術の博物館・コレクション国際委員会	42
17. ICMAH 考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会	44
18. ICME 民族学の博物館・コレクション国際委員会	46
19. ICMEMO 公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会	48
20. ICMS 博物館セキュリティ国際委員会	50
23. ICOMAM 武器・軍事史博物館国際委員会	52
24. ICOMON 貨幣博物館国際委員会	54
25. ICR 地方博物館国際委員会	56
26. ICTOP 人材育成国際委員会	58
28. MPR マーケティング・交流国際委員会	60
29. NATHIST 自然史の博物館・コレクション国際委員会	62
30. UMAC 大学博物館・コレクション国際委員会	64



## I . 2018 年度 ICOM 国際委員会年次大会開催一覧

## I. 2018年度ICOM国際委員会年次大会開催一覧

	略称	正式名称	日本語訳	時期	場所	テーマ
1	AVICOM	ICOM International Committee for Audiovisual and New Technologies and Social Media	オーディオビジュアル及び映像・音響新技術国際委員会	5月29日 -6月1日	メヒヤニヒ (ドイツ)	Inheriting cultural heritage by new media
2	CAMOC	International Committee for the Collections and Activities of Museums of Cities	都市博物館のコレクション・活動国際委員会	6月2日 -5日	フランクフルト (ドイツ)	The Future of Museums of Cities
3	CECA	International Committee for Education and Cultural Action	教育・文化活動国際委員会	9月23日 -27日	トビリシ (ジョージア)	Cultural Action: Meanings
4	CIDOC	International Committee for Documentation	ドキュメンテーション国際委員会	9月29日 -10月5日	イラクリオン (ギリシャ)	Provenance of Knowledge
5	CIMCIM	International Committee for Museums and Collections of Musical Instruments	楽器の博物館・コレクション国際委員会	9月10日 -15日	武漢/上海 (中国)	Theory, Technology, and Methods : Museums' Interpretation of Musical Traditions
6	CIMUSET	International Committee for Museums and Collections of Science and Technology	科学技術の博物館・コレクション国際委員会	10月15日 -18日	オタワ (カナダ)	Museums in the Digital World
7	CIPEG	International Committee for Egyptology	エジプト学国際委員会	9月4日 -8日	スウォンジー (イギリス)	Beating Barriers! Overcoming Obstacles to Achievement
8	COMCOL	International Committee for Collecting	コレクティング国際委員会	9月25日 -28日	ウニペグ (カナダ)	Contemporary Collections: Contested and Powerful
9	COSTUME	International Committee for Museums and Collections of Costume	衣装の博物館・コレクション国際委員会	6月25日 -29日	ロンドン (イギリス)	The Narrative Power of Clothes
10	DEMHISt	International Committee for Historic House Museums	歴史的建築物の博物館国際委員会	10月10日 -14日	バクー (アゼルバイジャン)	Decorative Arts and Interiors
11	GLASS	International Committee for Museums and Collections of Glass	ガラスの博物館・コレクション国際委員会	9月24日 -29日	サンクトペテルブルグ (ロシア)	The Glass Museums and Collections in Russia
12	ICAMT	International Committee for Architecture and Museum Techniques	建築・博物館技術国際委員会	9月6日 -8日	エスボ—/ヘルシンキ (フィンランド)	useum Architecture, Exhibition Techniques & Exhibitions Design
13	ICDAD	International Committee for Museums and Collections of Decorative Arts and Design	装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会	10月10日 -12日	バクー (アゼルバイジャン)	Decorative Arts and Interiors
14	ICEE	International Committee for Exhibition Exchange	展示・交流国際委員会	11月11日 -17日	マドリッド/バルセロナ (スペイン) (ICEEとICFA共同開催)	Cultural Heritage: Transition and Transformation
15	ICFA	International Committee for Museums and Collections of Fine Arts	美術の博物館・コレクション国際委員会			
16	ICLM	International Committee for Literary Museums	文学の博物館国際委員会	8月3日 -8日	リガ (ラトビア)	Personalities and Time in the Museum Exhibition
17	ICMAH	International Committee for Museums and Collections of Archaeology and History	考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会	10月10日 -12日	イスタンブール (トルコ)	Corporate Museums
18	ICME	International Committee for Museums and Collections of Ethnography	民族学の博物館・コレクション国際委員会	10月9日 -15日	タルトゥ (エストニア)	Corporate Museums
19	ICMEMO	International Committee of Memorial Museums in Remembrance of the Victims of Public Crimes	公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会	10月14日 -18日	テルアビブ/エルサレム (イスラエル)	Memory, Art, and Identity

20	ICMS	International Committee for Museum Security	博物館セキュリティ国際委員会	9月18日 -22日	ナイロビ (ケニア)	Disaster Management
21	ICOFOM	International Committee for Museology	博物館学国際委員会	10月15日 -19日	テヘラン (イラン)	Museology and the Sacred
22	ICOM-CC	International Committee for Conservation	保存国際委員会	開催なし		
23	ICOMAM	International Committee for Museums of Arms and Military History	武器・軍事史博物館国際委員会	9月30日 -10月3日	リュブリヤナ (スロベニア)	War and Peace, Fear and Happiness
24	ICOMON	International Committee for Money and Banking Museums	貨幣博物館国際委員会	10月3日 -6日	アテネ (ギリシャ)	Future-proofing Numismatics in Museums: Issues of Conservation and Collection Management
25	ICR	International Committee for Regional Museums	地方博物館国際委員会	11月5日 -9日	オーカランド/ウェリントン (ニュージーランド) (ICRとICTOP共同開催)	Facing the new political realities: Rethinking training for regional museums
26	ICTOP	International Committee for the Training of Personnel	人材育成国際委員会			Facing the New Political Realities: Rethinking Training for Regional Museums
27	INTERCOM	International Committee on Management	マネージメント国際委員会	2月23日 -25日	コルカタ (インド)	Entrepreneurial Management
28	MPR	International Committee for Marketing and Public Relations	マーケティング・交流国際委員会	10月8日 -11日	シカゴ (アメリカ)	Communicating with Heart: Putting People at the Center
29	NATHIST	International Committee for Museums and Collections of Natural History	自然史の博物館・コレクション国際委員会	11月5日 -9日	テルアビブ (イスラエル)	Natural History Museums in Time and Place
30	UMAC	International Committee for University Museums and Collections	大学博物館・コレクション国際委員会	6月21日 -24日	マイアミ (アメリカ)	Audacious Ideas: University Museums and Collections as Change-Agents for a Better World



## II. ICOM 国際委員会の紹介

## II. ICOM 国際委員会の紹介

### AVICOM

#### International Committee for Audiovisual and New Technologies and Social Media

##### オーディオビジュアル及びソーシャルメディア新技術国際委員会

AVICOM は博物館や文化施設において、オーディオビジュアル、ソーシャルメディアをはじめとする最新技術を駆使して、収集やサービスの提供に従事する専門家によって構成される国際委員会です。オーディオビジュアル技術の活用、映像や音響や関連設備に関する法的/経済的課題、収集・保存・修復について研究し、提言を行います。

### CAMOC

#### International Committee for the Collections and Activities of Museums of Cities

##### 都市博物館のコレクション・活動国際委員会

CAMOC は、都市に関する博物館に勤務し、または関心を持っているメンバーのためのフォーラムです。構成員はその知識や経験を共有し、意見を交換し、国際間のパートナーシップを広げています。そして、博物館同士の話し合いと協力を勧め、都市の過去・現在・未来をつなぐ独自の資料を収集、保管、展示することを支援し奨励し、それにより、都市の独自性を強化し、その発展に貢献しています。活動は、年1回各国で開催される定例会、ワーキンググループ、会議の会報とニュースレターの出版などです。

### CECA

#### International Committee for Education and Cultural Action

##### 教育・文化活動国際委員会

CECA の会員は、博物館の教育担当者、教育に関心を持つ他の博物館専門職で構成されています。構成員は全ての館種から来ており、博物館教育のあらゆる分野に係わっています。即ち、研究、管理、展示解説、展示、事業、メディア、評価。この委員会の目的は国際レベルでの博物館教育に関する情報とアイディアの交流、ICOM の政策、決定、事業に博物館教育が含まれるようにする事、世界における博物館の教育目的の擁護、博物館教育の専門的基準を高める事等です。CECA は年次会議を開き、その経過は印刷物で発表されています。又、ニュースと ICOM Education を年1回発行しています。博物館教育に関する国際的なハンドブックも準備中です。

### CIDOC

#### International Committee for Documentation

##### ドキュメンテーション国際委員会

CIDOC は、博物館コレクションのドキュメンテーション専門の機関です。本委員会は、ドキュメンテーション、登録、コレクション管理、コンピュータ化に関心のあるキュレーター、図書館員、情報専門家に共同作業の機会を与えます。会員はニュースレターを受領し、年次会議やデータの標準化(文化遺産の一般、固有の両面)、マルチメディア、インターネット等に関する多くの活動的なワーキンググループに参加できます。

### CIMCIM

#### International Committee for Museums and Collections of Musical Instruments

##### 楽器の博物館・コレクション国際委員会

CIMCIM はすべての国における全ての種類の楽器コレクションと博物館に関する専門的活動を促進、組織化することを目的としています。会員は定期会議やその他の会議に参加し、コミュニケーション、保存、ドキュメンテーション、教育、展示、伝統楽器、訓練、楽器コレクションの国際的目録などのワーキンググループに参加し、その結果の報告書等に貢献しています。会員は各種の研究や文献目録に掲載されている CIMCIM ニュースレターを受取ることができます。

## **CIMUSET**

### **International Committee for Museums and Collections of Science and Technology**

#### **科学技術の博物館・コレクション国際委員会**

CIMUSET は、科学技術分野の博物館専門職で構成されています。歴史的資料を収集する伝統的な科学技術博物館と、主として子供と若者に科学技術を普及し、その知識の増進に努める科学センターの双方のためのものです。CIMSET は年次会議を開いています。

## **CIPEG**

### **International Committee for Egyptology**

#### **エジプト学国際委員会**

CIPEG の使命はエジプトコレクション、遺跡等の保存関係者間の協力を促進することです。更に、ICOM の事業の枠内で、エジプト学会国際協会(IAE)と緊密に協力して、エジプト美術、考古学の、特にちいさなコレクションの保存を支援しています。CIPEG は博物館コレクションにおけるエジプト資料の国際的カタログプロジェクト「Corpus Antiquitatum Aegyptiacarum (CAA)」及びエジプト学のジソーラス(専門辞典)の多国語訳も進めています。又、CIPEG の会員はエジプトにおける博物館的計画も支援しています。これは子供及び、大人のための教育事業の促進や発展も含みます。また、CIPEG は博物館、大学、研究所間の協力にも努めています。会員は年1回のニュースレターを受領し、年次会議への参加ができます。

## **COMCOL**

### **International Committee for Collecting**

#### **コレクション活動に関する国際委員会**

COMCOL は、コレクションの収集とコレクション(有形・無形の双方)の発展に係わる実践、理論及び倫理について、議論を深め、知識を分かち合うことを深めることを使命としています。COMCOL は、広い意味でのコレクション収集に関連した考え方と経験について、専門的な見地から交換するプラットフォームです。この委員会は、コレクション収集と除外の方策、現在のコレクション収集、文化財の返還、模範となる実践を担当します。COMCOL の目的は、国境を越えた協力と協調を促進し、博物館における革新を涵養し、コレクション発展の職務において、博物館専門職を励まし助けることがあります。COMCOL は、年次総会とワーキンググループを組織し、そのメンバーに対するニュースレターを発行します。

## **COSTUME**

### **International Committee for Museums and Collections of Costume**

#### **衣装の博物館・コレクション国際委員会**

COSTUME は衣装の全分野に於ける研究、解説、保存等の博物館専門職のフォーラムを実施しています。委員会への参加は、研究プロジェクト、展示、保存、保管技術等の専門知識を共有したい方へ開かれています。情報の普及は、専門小委員会の装置、パンフレット、ニュースレター、研究論文出版により行われます。年次会議会報がくばられ、時宜に適したテーマに関連した討論がされています。

## **DEMHIST**

### **International Committee for Historic House Museums**

#### **歴史的建築物の博物館国際委員会**

DEMHIST は、伝統建築物(house museum)の運営、保存等の基準について論議し、提案するフォーラムです。伝統建築物(house museum)とは、家具、装飾、収蔵品なども含めて創設当時の生活の状況を歴史的意味を持たせて、保存されている建造物です。本委員会の主な目的は多種多様の伝統建築物(house museum)を方法論により分類する事です。伝統建築物で展示される美術的豊かさを考慮して、本委員会は会議を組織し、地域保護、復元、警備、教育、コミュニケーション等の事項を討議し、解決案を提示します。

## **GLASS**

### **International Committee for Museums and Collections of Glass**

## ガラスの博物館・コレクション国際委員会

GLASS は古代より現在までの全世界のガラス器の研究を専門的に行う委員会です。会員はガラスを主として専門とする学芸員及び保存専門家で構成されます。会員はニュースレターを受領し、年次会議に参加できます。

## ICAMT

### International Committee for Architecture and Museum Techniques

#### 建築・博物館技術国際委員会

ICAMT は、博物館建築、企画、建設、事業編成、その他展示製作やデザインのあらゆる側面に关心を持つすべての人たちに、アイディアや知識を交換するフォーラムを提供しています。この委員会では、展示製作に使用する基本素材から展示解説の哲学的側面まで、あらゆる事柄について話し合います。ICAMT ではニュースレター「Brief」を年2回発行しています。年次会議、委員会の理事会やワーキンググループの会議では、会員に協力の機会を提供しています。

## ICDAD

### International Committee for Museums and Collections of Decorative Arts and Design

#### 装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会

ICDAD は、博物館・家屋・城・歴史的記念物などに保存されている応用・装飾美術の博物館とコレクションを専門としています。この委員会では、歴史的な室内装飾、応用美術コレクション、現代のデザインに关心を持っています。会員は年次会議に出席し、この会議中、提案したテーマについて短い講演を行うことができます。さらに、この会議期間中、メンバーは博物館、歴史的な建造物や記念物、芸術家やデザイナーのワークショップ、ギャラリー、個人コレクションの団体訪問に参加できます。

## ICEE

### International Committee for Exhibition Exchange

#### 展示・交流国際委員会

ICEE は、展示に関する知識と経験の普及のためのフォーラムです。この委員会では展示の開発・巡回・交換のさまざまな側面を扱います。また、既存の移動展示会やその可能性についての情報収集も行っています。年次会議では、展示の企画に携わる博物館専門職に、討論や貴重なネットワークづくりの機会を提供しています。最近開始した出版物シリーズでは、具体的な問題点についての情報や実践的な解決策を提供し、専門職の人たちが有益で、情報に富み、費用効率の良い展示を構成するのを支援しています。

## ICFA

### International Committee for Museums and Collections of Fine Arts

#### 美術の博物館・コレクション国際委員会

ICFA は美術の博物館・美術館で働く専門職員によって構成されています。近年では、博物館・美術館のデザインと建築、歴史的環境、美術品の不法売買についても議論しています。

## ICLM

### International Committee for Literary Museums

#### 文学の博物館国際委員会

ICLM の主たる目的は、文学に関する、歴史・伝記の博物館、及び作曲家の博物館のための、研究、出版、展示、教育等の活動を促進することにあります。会員は25カ国からの学芸員で構成されます。会員は、年1回のニュースレターの受領、年次会議そしてワーキンググループ活動に参加できます。

## ICMAH

### International Committee for Museums and Collections of Archaeology and History

#### 考古学・歴史の博物館・コレクションの国際委員会

ICMAH は、考古学と歴史の博物館を専門としています。文化遺産を解説・紹介・保管する機構として、こうした博物館では人間と人間が暮らす社会や環境との複雑な関係を解説しています。ICMAH では歴史の解釈に関心を持っており、学際的な枠組みの中でさまざまな研究方法を開発する活動を行っています。また、この委員会では考古学を歴史研究に欠かせない側面としてとらえています。ICMAH は、考古学と歴史の博物館に相互コミュニケーションの機会を与える、アドバイスや情報を提供しています。ICMAH ではニュースレター「ICMAH Information」や会議の議事録を発行しています。さらに、数多くのワーキンググループを編成し、年次会議を開催しています。

## ICME

### **International Committee for Museums and Collections of Ethnography**

#### **民族学の博物館・コレクション国際委員会**

ICME は、地方・各国・国際の文化に由来する民俗学に関する博物館とコレクションを専門とします。本委員会は、世界的変動の中での民族学博物館とコレクションが持つ問題について関心を持ちます。ICME は、会員に委員会の活動をニュースレターで伝えます。年次会議は特定の議題を取り上げ、ワーキンググループは現在の関心事項をトピックとして設けられます。

## ICMEMO

### **International Committee of Memorial Museums in Remembrance of the Victims of Public Crimes**

#### **公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会**

ICMEMO は 2001 年 7 月に設立されました。この新しい委員会は、歴史に関する信頼にたる記憶を培い、記録し、UNESCO の主たる目的でもある「平和」のために、教育と知識の活用を通じて文化的な強調を推進することを目指しています。これら記念博物館の目的は、国家の、社会的に定められ、イデオロギー的に動機付けられた犯罪を記録することにあります。施設は多くの場合、犯罪がなされた歴史的場所や生存犯罪被害者が追悼のために選んだ場所に位置しています。これらの博物館は歴史的な見通しを保持しつつ、現在へと強く結びつけるような方法で、歴史的出来事についての情報を伝達しようと努めています。

## ICMS

### **International Committee for Museum Security**

#### **博物館セキュリティ国際委員会**

ICMS には保安・防火・防災の分野の専門職やスペシャリストが参加しています。ICMS の目的は、教育・研修・援助を提供して、盗難・野蛮行為・火事・破壊から人間や文化財産を保護することです。ICMS が設置しているワーキンググループには、物理的セキュリティ、技術的セキュリティ、防火セキュリティ、防災体制、研修、出版物、規則などに関するものがあります。委員会のメンバーはセキュリティに関する出版物やニュースレターを受け取ります。メンバーは年次会議に出席することができ、この会議では博物館セキュリティの世界的な状況や最近の盗難などについて討論・分析が行われます。この会議は年ごとに異なる国で開催されています。さらに ICMS は、米国博物館セキュリティ会議と協力して、ワシントン DC で展示会を開いています。この委員会は、ICOM とその会員にとって、セキュリティ・防火・防災の問題に関する最も大切なアドバイザーの役割を果たしています。

## ICOFOM

### **International Committee for Museology**

#### **博物館学国際委員会**

ICOFOM は博物館学に関する討議のための国際的なフォーラムです。最も広い意味では、博物館学とは、文化・自然遺産の保護・解説・コミュニケーションに関する人間の個別または集合的なあらゆる行動に対する理論的探求を扱うものであり、特定の人間と対象物との間に生じる社会的なコンテクストを扱うものです。博物館学の分野は博物館自体の研究よりもはるかに幅広いのですが、中心となるのは社会における集団記憶の保管場所としての博物館の持つ機能・活動・役割です。ICOFOM はさまざまな博物館専門職の研究も行っています。主なテーマには理論と実践の相互関係があります。博物館の仕事の実践的な側面は、博物館記述学(ミューゼオグラフィ)や展示記述学(エキスポグラフィー)と呼ばれています。年次会議の記録はすべて ICOFON Study

Series の中で発表されています。ニュースレターでは常に最新の動向を会員に知らせています。

### **ICOM-CC**

#### **International Committee for Conservation**

##### **保存国際委員会**

ICOM-CC は 23 のワーキンググループを持ち、保存専門家、科学者、博物館専門職、その他の専門職に協力と文化的、歴史的に重要な作品の保存と分析を促進する機会を提供しています。会員は、役員会、及びワーキンググループのニュースレター及び3年次会議の事前資料で ICOM - CC の活動を知ることが出来ます。会員は他の専門的な国際会議にも参加できる。過去 10 年間に約 1000 の専門店な発表がなされ、出版されています。

### **ICOMAM**

#### **International Committee for Museums of Arms and Military History**

##### **武器・軍事史博物館国際委員会**

ICOMAM は、武器、甲冑、火器、要塞、軍服や旗に関する研究を促進し、そのような武具の修復保存に携わる団体と博物館との関係を発展させ保持することを目指しています。ICOMAM は博物館学の分野において、この特定主題を包括的に扱う団体としては、唯一の国際的な組織であります。ICOMAM は3年に一度、関連する議題を掲げて会議やシンポジウムを開催しています。武具の修復と調査に対する委員会の取り組みは、科学的・客観的・人道的なものです。委員会は、設置目的の範囲内で歴史的文脈において、世界史上の重要性に目を向けながら、兵器について考察します。ICOMAM は社会学的文脈の中で、政治、経済、社会、芸術における役割を検証しながら兵器を調べることにも、等しく関心を持っています。委員会は、軍事史と軍事博物館のコレクションが私たちの文化遺産の一部であることを明らかにしたいと思っています。

### **ICOMON**

#### **International Committee for Money and Banking Museums**

##### **貨幣博物館国際委員会**

ICOMON は貨幣博物館(独立した施設、またはより大きな一般的コレクションの一部としての)、金融・経済機関または企業の博物館、のために創設されました。ICOMON は会員の持つ博物館に関する問題を専ら扱い、収蔵資料の取得・保存、盗難、管理、教育プロジェクト、構想、プレゼンテーションと展示、環境条件コントロールなどを討議するフォーラムです。本委員会は、より広く、あるいは深く討議する機会を設けます。年次会議を開催します。

### **ICR**

#### **International Committee for Regional Museums**

##### **地方博物館国際委員会**

ICR は世界で最も数の多い、地方博物館のために創設されました。地方博物館は不便な地域、広い地域のいずれのためにもあります。ICR は、地方博物館と地域との関係、歴史、環境、社会的発展、そして言語について関心を持ちます。特に数百万の人々の基本的なアイデンティティーに影響を与えてきた、社会的、政治的変動期における地方博物館の挑戦、哲学、方法論、国際協力に関心を持ちます。ICR は、年2回のニュースレターの発行と、年次会議を開催しています。

### **ICTOP**

#### **International Committee for the Training of Personnel**

##### **人材育成国際委員会**

ICTOP の主な目標は、博物館専門職の研修、専門性の開発、全経歴を通しての職業基準の確立の促進にあります。ICTOP は他の ICOM 国際委員会と密接に交流し、この目標達成に向けて活動しています。その活動には、年 2 回、ニュースレター『International Directory of Museum Training』の発行をすると共に、年次会議、会合を開催する事が含まれます。また、ICTOP は専門職研修のカリキュラム提案作成のアドバイザー

としても活動しています。

## **INTERCOM**

### **International Committee for Museum Management**

#### **マネージメント国際委員会**

INTERCOM は全世界の博物館の健全な運営管理を目指しています。本委員会の主たる目的は、管理面としての政策形成、立法、資産管理です。また、イコム職業倫理規定実行の監督も行います。

## **MPR**

### **International Committee for Marketing and Public Relations**

#### **マーケティング・交流国際委員会**

MPR は、博物館におけるマーケティング、コミュニケーション、開発(基本調達)部門の博物館専門職により構成されます。MPR では会員に対し、専門能力の成長、優れたコミュニケーションとマーケティング能力の向上の実施、そして専門職間のネットワークの促進の機会を提供します。ICOM が必要とする場合は、そのアドバイザーを務めます。MPR は、電子メディア、書籍の発行、ニュースレターにより、会員、または他の専門職に対し情報を提供します。本委員会は博物館のコミュニケーション、そしてマーケティングの専門職と他の分野の人々との交流会議を計画し、実施します。

## **NATHIST**

### **International Committee for Museums and Collections of Natural History**

#### **自然史の博物館・コレクション国際委員会**

NATHIST は、博物館のコレクションおよび自然環境での生物学的多様性の保全、世界の自然遺産の科学的研究、博物館の展示・会議・実地見学などを通じた幅広い大衆の教育に関心を持っています。ニュースレターでは、委員会の構成員間のつながりを保つようにしています。また自然とその保護へ関心の高まりにより益々求められている。この委員会では年次会議を開催しています。

## **UMAC**

### **International Committee for University Museums and Collections**

#### **大学博物館・コレクション国際委員会**

UMAC は学術的な博物館・美術館やコレクション(植物園を含む)で働く、もしくはその業務に関わっているすべての人々のためのフォーラムです。UMAC は高等教育機関や、それが奉仕する地域社会におけるコレクションの役割に関心を持っています。委員会は、コレクションのもつ資源的価値に関して提携の機会を確認したり、知識や経験を共有したり、コレクションへのアクセスを広げるための場をメンバーに提供します。その目的は大学の管理下にある遺産を保護することです。UMAC はその目的を遂行するために年間を通してあらゆる方法でメンバーと連絡をします。UMAC は必要があれば、その任務の範囲内で ICOM や他の職業団体へアドバイスを行います。



### III. ICOM 国際委員会年次大会参加報告書

## 2. CAMOC

### International Committee for the Collections and Activities of Museums of Cities

#### 都市博物館のコレクション・活動国際委員会

##### 参加者名：

邱 君妮 (ICOM 京都大会準備室)

##### 開催期日：

6月2日：ワークショップ（移民：都市|移民・新住民とその受入都市プロジェクト）

6月3日：エクスカーション

6月4日-5日：年次大会（セッション発表、レセプションと総会）

##### 実施場所：

フランクフルト歴史博物館・フランクフルト・ドイツ

##### 今年度年次大会テーマ：

The Future of Museums of Cities (都市博物館の未来)

##### プログラムリンク：

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/camoc/CAMOC\\_Annual\\_Conference\\_2018\\_Frankfurt\\_Programme.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/camoc/CAMOC_Annual_Conference_2018_Frankfurt_Programme.pdf)

##### 年次大会概要及び参加所見：

###### 1) 年次大会のテーマと内容

今回の会議には、およそ 75 人の参加者があった。名簿上では、ヨーロッパからの参加者は 60 人（うちドイツから 13 人）、北米 6 人、アフリカ 3 人、アジア・太平洋からは 6 人であった。

6月2日のワークショップ（移民：都市・移民・新住民とその受入都市プロジェクト）では、イギリス州・モダンとロンドン郊外にある Hackney ミュージアムの 2 人の基調講演者が、異なる規模の博物館が移民・新住民を受入れている活動について紹介したあとに、ユネスコ職員から世界規模の活動を分析し、オランダ、ドイツ、イタリア、台湾とフランスの事例発表が行われた。3 日のエクスカーションは、市内の博物館を地域ごと 4 つのグループに分け、地元専門家によりフランクフルトと都市博物館の関係性を説明しながら、博物館見学をおこなった。

4-5日の年次大会プログラムは主テーマ「The Future of Museums of Cities (都市博物館の未来)」から、4 つのサブテーマ：①The Future of Museums of Cities (都市博物館の未来)、②New Roles and Responsibilities: Urban Life, Museums of Cities and Ethics (新しい役割と責任：都市生活、都市博物館と倫理)、③Sustainable Cities and City Museums (持続可能な都市と都市博物館)、④Towards a new definition or new definitions of city museums? (新しい定義または都市博物館の新しい定義に向けて) により構成された。

CAMOC では、2005 年の創設以来、都市博物館の数が大幅に増加したため、今回 CAMOC の設立精神を改めて検討する議論を行った。また都市博物館について、都市の「場」として広い視野で捉えようとする基調講演や発表が続き、会議では、上記サブテーマをもとに、時代の変化によって多様性を持つ都市住民に対して、都市博物館は限られた資源を活用して、どのような役割を果たすことができるのかといった議論を展開した。筆者の発表を含め、都市政策や都市開発のなか、エコミュージアムが都市博物館として役割を果たす可能性を検討し、様々なタイプの博物館が都市博物館としてどのように位置づけされ得るかとの議論を行った。そのほか、世界中の都市博物館における知識、状況を共有する事例発表や、現在および将来のモデルや都市博物館の定義を議論する発表もあった。

テーマ④では、ICOM の「博物館の定義、見通しと可能性における常設委員会」によって進行中の、京都大会時に新しい「博物館の定義」を提示するプロジェクトの一環として、都市博物館の現在と未来に焦点を当て、都市博物館はどのような使命を果たし、最終的に都市生活を向上させ得るかを検討した。

## 2) ICOM 京都大会の PR

総会に 10 分間のプレゼン時間をいただき、パンフレットを配布し、説明及び質疑応答を行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

参加者からの主な質問は、京都大会の主会場である国際会館へアクセス、宿泊情報、参加助成金などであった。京都大会について、年次大会の参加者から大変良い反応を受けたほか、ボードメンバー全員が同一ホテルで宿泊できるようにとの要望、国内外の博物館関係者の参加意欲を向上するために、京都大会に向けての進捗状況を随時発信する必要性が指摘された。

京都大会に向け CAMOC 京都大会実行委員会を立ち上げることとし、ワーキング・スケジュールを決定した。ASPAC や DEMHIST とのジョイントセッションの進め方についても議論し、舞鶴ミーティングの際に内容を固める方針が決まった。CAMOC 独自の会議やオフサイトミーティングについては、窓口担当者やその協力者を中心に検討を行い、大会のテーマに沿った特色あるプログラムを企画することとされた。



開会式の様子(委員長と副委員長の会議趣旨説明)



エクスカーションでの博物館見学の様子



総会で京都大会を PR する様子



セッション発表の様子

**4. CIDOC**  
**International Committee for Documentation**  
**ドキュメンテーション国際委員会**

**参加者名 :**

嘉村 哲郎 (東京藝術大学 芸術情報センター)

**開催期日 :**

2018年9月29日 : ボードミーティング (CIDOCの運営に関する内容及び2019年の大会について)

2018年9月30日 : ワークショップ参加 (博物館におけるWikimediaの活用)

2018年10月1日~4日 : 年次大会 (セッション発表、レセプションと総会)

2018年10月5日 : オプショナルツアー

**実施場所 :**

Cultural Conference Centre of Heraklion (CCCH)・ギリシャ共和国・クレタ島

**今年度年次大会テーマ :**

Provenance of Knowledge

プログラムリンク :

<http://cidoc2018.com/sites/default/files/CIDOC2018-Daily-Program-v-0-6-20181002.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

2018年の会議は、おおよそ200名程度の参加者があった。9月29日~30日にかけて行われたワークショップは近年では最も多い12セッションが設けられた。参加したワークショップ「Make your museum more visible with Wikimedia projects」では8名の参加者があり、著作権フリーのデータ基盤 Wikipediaと画像データを管理するWikimedia、そして典拠データを統合管理するWikidataのそれぞれを博物館での活用可能性を議論するとともに、利用事例の紹介を元にハンズオン形式で実際にWikimediaとWikidataへのデータ公開を行った。10月1日から始まった年次大会では、Provenance of Knowledgeをメインテーマに、以下の4つテーマで行われた。

① Documentation: Models, Tools and Technology

CIDOC-CRMやLIDO、セマンティックWeb、データベース等データモデルが中心の博物館と情報学寄りの内容。

② Provenance and Documentation

コレクションの来歴や記述、知識を中心にコンテキストのドキュメンテーションを扱う内容。

③ Innovation in Documentation

画像データの来歴や人々の社会的記憶・記録のドキュメンテーション等、従来のミュージアムドキュメンテーションとはやや異なる、革新的なドキュメンテーションをテーマに内容。

④ Special Session

ドキュメンテーションに関するCIDOC-CRM、Getty Vocabularies、Wikidata、SPECTRUM等のデータ標準に関する複合的なセッションに加え、The National Museum of Brazil and ICOM/CIDOC Response to the Situationでは、2018年9月3日の火災で被害を受けたブラジル国立博物館に対して、CIDOCがどの様にしてアクション可能かの議論が行われ、ドキュメンテーションの視点から、コレクションデータの再構築やデータに基づいた資料の修復に関する支援の検討がなされた。

## 2) ICOM 京都大会の PR

総会時に 14 分間のプレゼンテーションの時間を頂いた。ICOM KYOTO2019 のパンフレットとニュースレターは、現地パートナーの資料と共に参加者がレジストレーション時に受け取れるよう、配布されたトートバッグに同梱して頂けた。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

参加者からの主な質問は、自国の ICOM 及び財団が ICOM2019 の渡航費用支援を実施するのにあたり、宿泊費用がどの程度係るのか、支援金を決めるための情報が早く欲しいという要望があった。また、中東からの参加者から政治情勢的にビザの取得が難しいかもしくないため、その様な場合の何らかの対応・手続き支援は得られるかという質問があった。さらに、参加助成金の申請時期と申請方法の質問があった。京都大会の開催にあたっては、宿泊場所から会場への移動方法の懸念が指摘されたため、経路や IC カード、切符の購入など交通機関に関する利用者情報の拡充が必要と感じた。

京都大会に向けた進捗は、CIDOC 側の幹事と 2019 年 4 月までのマイルストーンの確認を行い、大枠ではあるが、2019 年のテーマ内容及びプログラム募集に向けたトピックスの仮決めを行った。オフサイトミーティングは、会場提供側が希望するテーマ、ローン文化財やレプリカに関する内容を採択いただき、シンポジウムテーマは「Documenting Culture : the Culture of Documentation」となった。オフサイトミーティングに関しては当日の時間流れを決定し、登壇者は CIDOC 側から 2 名、日本側 3 名で分担する運びとなった。



オープニング及びキーノートセッションの様子



研究発表の様子



総会での京都大会 PR の様子



クノッソス宮殿跡見学会

## 5. CIMCIM

### International Committee for Museums and Collections of Musical Instruments

楽器の博物館・コレクション国際委員会

#### 参加者名 :

嶋 和彦 (浜松市楽器博物館)

#### 開催期日 :

9月 10-12 日 : 年次大会 (開会セレモニー、発表、演奏会、見学) (武漢)

9月 13 日 : 移動 年次大会 (特別講演)

9月 14-15 日 : 年次大会 (発表 総会 演奏会 見学 閉会セレモニー、エクスカージョン) (上海)

#### 実施場所 :

10-12 日 湖北省博物館・武漢・中国

13-15 日 上海音楽学院並びに上海東方楽器博物館・上海・中国

#### 今年度年次大会テーマ :

Theory, Technology, and Methods : Museums' Interpretation of Musical Traditions

(理論、技術、方法 : 音楽の伝統に対する博物館の解釈)

#### プログラムリンク :

<http://network.icom.museum/cimcim/what-we-do/meeting-2018/>

59.173.21.190

#### 年次大会概要及び参加所見 :

##### 1) 年次大会のテーマと内容

中国外から 42 人、中国から 25 人の計 67 人の参加。中国側関係者や大学生のボラティアを含めると 100 名以上の参加となった。欧米外からはジンバブエ 3、イラン 1、インドネシア 2、日本 1 と例年より多かった。会場の湖北省博物館は、考古学上世界的に有名な、紀元前 5 世紀の曾侯乙墓から出土した、巨大な青銅の鐘のセット「編鐘」を収蔵していることで知られる。メインテーマ Theory, Technology and Methods : Museums' Interpretation of Musical Traditions (理論、技術、方法 : 音楽の伝統に対する博物館の解釈) のもと、6 つのサブテーマ Museums and Collections(博物館とコレクション)、The Interpretation of Technology (テクノロジーの解釈)、The Methods of Presentation (展示の方法)、The Collections of Musical Objects (音楽資料のコレクション)、Cases of Technology and Method(テクノロジーと方法の実例)、Practice of Music Museums (音楽博物館の実践) で発表があった。

開会セレブーションでは京劇のダイジェストを上演、開催国の誇りが感ぜられた。11 日はメトロポリタン博物館 (以下 MET) の楽器部門名誉キュレーターの基調講演に続き、10 の発表があった。MET の楽器展示は現在リニューアル中で完成部分が公開されているが、注目すべき点は、楽器分類学に基づく従来の展示から、時間軸に基づいた、文化的分類を含めながらの、世界の楽器の展示に変えたことである。その他の発表では、博物館の国際性、展示と保存に関する考察、モバイル端末機器での楽器解説例等が報告された。午後は武漢音楽学院にて世界遺産中国古琴の演奏を聴いた。併設の楽器博物館では古琴と編鐘の展示を観覧した。夜は湖北省博物館を見学。

12 日~15 日は 23 の発表と 2 つのポスターセッションがあった。アジア・アフリカ各国からは伝統音楽と楽器の記録と伝承、国民のアイデンティとしての楽器と音楽などの報告が目立った。従来の楽器単体に対する楽器学的研究から、楽器を文化の生態系のひとつとして観る研究方法も報告された。筆者は博物館での楽器作りと演奏の子どもワークショップ「小さな尺八『一節切』」を作って演奏しよ

う」の実践報告をした。14日のCIMCIM年次総会では、新ミッションやICOM京都大会の予定が報告された。

会期中武漢を流れる漢江でのクルージングで会員の親交を深めたり、上海博物館、上海東方楽器博物館、敦煌莫高窟壁画楽器をテーマとする展覧会、曾侯乙墓編鐘（レプリカ）演奏会、智化寺伝承音楽演奏会、敦煌琵琶譜復元演奏会、上海郊外朱家角村エクスカーションでの江南音楽演奏会などを視察した。最終日には中国国内19の音楽系博物館の協会CCMIとCIMCIMとの友好協定の署名がなされた。

全体を通じて、博物館に対する中国の熱意が強く感じられた。また大学生ボランティアが大変よく世話をしてくれ、また勉強熱心で、中国の博物館や音楽、楽器に対する並々ならぬ情熱を感じた

## 2) ICOM京都大会のPR

総会にて10分間、動画の投影。パンフレットの配布、説明及び質疑応答をした。大会テーマであるCultural Hubsは現在のCIMCIMや博物館の在り方を考える上で大変時宜を得た適切なテーマであると伝えた。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

京都大会には参加者一同ぜひ参加したいと言われた。ただ、欧米では9月は何かと忙しいとのことで、うまく時間が取れるかどうか心配だとの声もあった。他ICとのジョイントセッションについては4日にCIDOCと、5日にオフサイトミーティングでICMEと開催する予定だが、最終決定はまだである。

CIMCIMメンバーからは浜松市楽器博物館を見学したいというメンバーが多く、CIMCIM独自のエクスカーションの可能性もある。



編鐘・伝統楽器・舞踏の古代音楽演奏（湖北省博物館）



プレゼン発表する嶋（湖北省博物館）



インドネシア国立博物館の発表（上海音楽学院）



江南音楽演奏会（朱角家村エクスカーション）

## 6. CIMUSET

### The International Committee for Museums and Collections of Science and Technology

科学技術の博物館・コレクション国際委員会

#### 参加者名：

若林 文高（国立科学博物館）

#### 開催期日：

10月15日-17日：年次大会（セッション発表、レセプション、見学会、総会、ディナー）

10月18日：エクスカーション（モントリオール：博物館・科学館見学）

#### 実施場所：

15日：カナダ航空宇宙博物館・オタワ・カナダ

16・17日：カナダ科学技術博物館・オタワ・カナダ

#### 今年度年次大会テーマ：

Museums in the Digital World（デジタル社会における博物館）

#### プログラムリンク：

<https://cimuset.ingeniumcanada.org/program/#not-set:all>

<https://cimuset.ingeniumcanada.org/wp-content/uploads/2018/10/Conference-Program-EN.pdf>

#### 年次大会概要及び参加所見：

##### 1) 年次大会のテーマと内容

今回は IATM（International Association of Transport and Communications Museums\*：国際交通・通信博物館協会）との共同開催で、会議全体の参加者は名簿によると70名。北米24名（カナダ23、米1）、南米1名、旧西欧20名（独6、フィンランド5）、旧東欧11名（露2、スロベニア3、クロアチア・チェコ各2）、アジア12名（中国6、韓国3、インド・モンゴル・日本各1）、アフリカ（モロッコ）1名、中近東（イラン）1名であった。

初日の10月15日は、会場の2館長および主催者のCIMUSETとIATM\*の議長の挨拶で始まった。最初にカナダ宇宙庁長官のS. Laporteによる基調講演があり、宇宙庁が青少年に科学・技術や数学に興味を持つてもらうために実施している博物館等でのさまざまな試み、および日本も参加している新しい宇宙開発プロジェクトについて魅力的なプレゼンテーションを行った。その後、今回のテーマに沿って基調講演1件、招待講演5件、一般講演15件が3日目の午前まで行われた。講演内容は、最新のデジタル技術を用いた展示の試みや博物館情報のデジタル化、さらにデジタル化時代とは距離をおいた「スロー博物館」の試みなど多彩であり、デジタル化・情報化の波から博物館は逃れることはできないが、それをどう取り込んでいくかは、それぞれの博物館で異なることが浮き彫りにされた感がある。デジタル化による弊害などを議論した発表もあり、今後の議論の必要性を訴えた点で、今回のテーマ設定は時期をうまく捕らえたと思われる。また、会場の科学技術博物館では、現在、展示館の隣に展示館より立派な収蔵庫を建設中で、それに関する発表もあり、博物館、特に科学技術系の博物館の収蔵庫の在り方を提案するもので、参考にしたい事例であった。

3日目は CIMUSET 単独での開催で、午前中の最後の講演のあと総会が開催され、これまでの1年間の活動報告、予算・決算報告がされた。議長からは、ICOM本部が CIMUSET の活動を高く評価し、予算配分が予定より多かったことが報告され、今後もアクティビティの高い活動をしていくことを約束した。また、10月の舞鶴ミーティングと ICC Kyoto 見学会に参加した Secretary の Ms. Johanna Vähäpesola からその報告があった。会場の ICC Kyoto は教会のような建物で、まわりの環境はたいへ

ん素晴らしいところだったと報告していたのが印象的だった。ボードメンバーおよび参加者の京都大会への期待は大きく、来年は是非京都を訪れたいと声をかけられた。また、2020年の年次大会は、中国、韓国、イランから立候補があったが、ボードメンバーによる協議で、これまで開催したことがないイラン（テヘラン）で行うことを決定したと報告され、イランの参加者からプロモーションビデオを使ったプレゼンテーションが行われた。

講演以外にも多彩なプログラムが用意された。初日は、夕方に会場の航空宇宙博物館の館内ツアーのあと展示場内でウェルカムディナーが開催された。2日目の午後は、中心街の運河のほとりにあるバイタウン博物館と、ARを活用したカナダ国立美術館の企画展を職員の説明を受けながら見学し、そのあとカナダ農業・食品博物館を見学し、レセプションをしながら同博物館に関する説明があった。会場の2館とこの農業・食品博物館はカナダの国立博物館で、3館が一体となり”Ingenium : Canada's Museums of Science and Innovation”という組織を構成している。3日目の午後は、自由行動のあと、夕方から会場の科学技術博物館の館内ツアーがあり、そのあと展示場内でディナーが行われた。

4日目は、エクスカーションで、バスで2時間の距離にあるモントリオールを訪れ、モントリオールの開拓の歴史を展示したポワンタカリエール考古学歴史博物館、およびモントリオール科学センターを見学し、それぞれ、職員による説明を受けた。考古学歴史博物館は、モントリオールに最初に入植された地の発掘場所に建てられ、地下にその遺跡が状態良く保存され、当時をしのぶことができる。エクスカーションの参加者は30名程度であった。参加者の一部はモントリオールから帰国するため、ここで別れた。帰りは、モントリオール市内の渋滞のため、オタワまで4時間を要した。CIMUSETの参加者は好奇心が旺盛で、このように時間がかかる場所でも見学したいという意欲にあふれていることを示す一幕であった。

\*IATMは、交通・通信関係の博物館の国際的組織で、会員数は約300名。ICOMの国際委員会ではないが、ICOMと連携しているとのこと。会員はCIMUSETと重なる部分がある。

## 2) ICOM京都大会のPR

パンフレットを配布し、ボードメンバーと京都大会の概要について協議した。10月のICC Kyoto 視察については、参加したSecretary (Ms. Johanna Vähäpesola) から報告があった。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

オフサイトミーティングについて日本側で準備を進めているが、今回の年次大会でボードメンバーと協議した。こちらで準備している京都市内の会場・コースを提示したが、ボードメンバーは京都以外での実施を強く希望しており、日程・費用などについて協議した。それを受け再度ボードメンバーで検討し、やはり、京都以外での開催を希望するとの結論になった。今後、日本側で候補地の選定・交渉、および概算見積等を行い、ボードメンバーと協議していくことになった。基調講演についてもボードメンバーと日本側とですりあわせをしながら選定・交渉していくことになった。



セッション発表（発表者が壇上で待機。質問も同時に）



航空宇宙博物館でのレセプション会場（初日）

**7. CIPEG**  
**International Committee for Egyptology**  
エジプト学国際委員会

**参加者名 :**

田澤 恵子 (公益財団法人 古代オリエント博物館)

**開催期日 :**

9月4日-7日 : 年次大会 (セッション発表; レセプション; 総会)

9月8日 : エクスカーション

**実施場所 :**

エジプトセンター (スウォンジー大学) ・スウォンジー・イギリス

**今年度年次大会テーマ :**

Beating Barriers! Overcoming Obstacles to Achievement

(限界への挑戦! 達成を目指して困難を克服するために)

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の年次大会参加者は54名で、昨年のシカゴ大会より2名増であった。開催国英国の他、ドイツ、デンマーク、オランダ、フランス、アメリカ、ロシア、ハンガリー、イタリア、ウィーン（順不同）からの参加者の他、日本からはCIPEG窓口委員の河合氏と田澤が参加し、各自報告を行った。

9月4日（火）の初日は午前中に開会式が行われ、スウォンジー大学副学長の挨拶に続き、CIPEG委員長より開会宣言、各ミュージアムより活動報告がなされた。その後、今年度のテーマ「Beating Barriers! Overcoming Obstacles to Achievement (限界への挑戦! 達成を目指して困難を克服するために)」に基づいて各自の報告がおこなわれた。午後前半のセッションは、最初にオープセンションとしてヴィザ（査証）の問題が扱われた。今回、英国への入国申請が却下されたエジプト人メンバーがおり、彼女はスカイプを使用することでエジプトから発表することになった（本件はBBC（英国放送協会）でも報道された）のだが、この経緯や各国のヴィザ事情、英国内の他の学会代表者による当該機関の実例などが報告された。この問題は、来年の京都大会に向けての懸案事項として注視すべきであろう。続いて、ワークショップ「Barrier and ice breaking session」では、参加者が現在職務上で抱えている悩みを交換し合い、互いに解決策を提案するという作業がおこなわれた。これによって、自分以外にも同じ課題を抱えている仲間がいることや、新しい視野を得ることができて前向きな気持ちになれたなどの成果が報告された。続いて、再度テーマに沿った各自の発表がおこなわれた。夜は「Night at Museum」として主催者Egypt Centreのエジプト資料を観覧した。

9月5日は、午前中に各自の発表、午後に総会とエクスカーションがおこなわれた。9月6日は、午前中と午後前半まで各自の発表が続き、午後後半にはエクスカーションとスウォンジー市長主催のレセプションがあった。9月7日は、午前中前半に各自の発表をおこなった後で最終討議に入り、午後はエクスカーションとなつた。

各自の発表では、「距離」という限界を超えるための共有オンラインデータベースの構築やインターネット電話サービスを使った博物館観覧の実例や可能性、「専門家不足」という限界を超えるためのミュージアム間の連動・協働への動きが特徴的であった。

9月8日は、終日エクスカーションとなり、年次大会は終幕した。

## 2) ICOM京都大会のPR

総会にて10分の枠をいただき（実際には進捗状況により5分に短縮）、CIPEG日本人メンバーによる準備状況も含めてプレゼンをおこなった。総会開始前には、会場入口でパンフレットを配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

参加者からは、日本や会場へのアクセスについて質問があった。これについては、日本側で詳細なアクセス情報を作成し、CIPEGのHPへ掲載して行くと共に、京都大会に向けてFacebookアカウントを作成し、国内外の双方に向けて参加意欲を高めるべく情報を発信していくこととした。

3日間のセッションのうち1日はCOMCOLとのジョイントセッションを計画しており、今後窓口同士での連絡も密に行う必要がある。舞鶴ミーティングにCIPEGからは委員長の代理で窓口委員二名が参加するので、その際にCOMCOL側との打合せを行う。また、もう1日は会場を国立京都国際会館外に設定し、エジプト学に焦点を当てたセッションも計画していくこととした。

オフサイトミーティングやポストコンフェレンスエクスカーションについては既にメンバーの希望を確認していたので、それに沿ってオフサイトミーティングの会場（MIHO MUSEUM）を調整して内諾を得ており、今後CIPEG委員長からの公式な依頼状の発行を進めていく。



開会式(主催者挨拶)



総会にて京都大会をPR



パンフレット配布



エクスカーション(博物館見学)

**8. COMCOL**  
**ICOM International Committee for Collecting**  
**コレクティング国際委員会**

**参加者名 :**

堀内しきぶ (奈良国立博物館 学芸部)

**開催期日 :**

平成 30 年 9 月 25 日～28 日

9 月 25 日 : COMCOL 役員会、オープニングレセプション

9 月 26 日 : セッション発表、ミュージアムツアー、夕食会

9 月 27 日 : セッション発表

9 月 28 日 : パネルディスカッション、ICOM 京都大会の広報、COMCOL 総会

**実施場所 :**

Canadian Museum for Human Rights • ウィニペグ・カナダ

**今年度年次大会テーマ :**

Contemporary Collections: Contested and Powerful

(コンテンポラリーコレクション : 議論された、パワフルな)

**プログラムリンク :**

<http://firhm.ca/program/>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の会議は、FIHRM (国際人権博物館連盟) とのジョイントで行われ、参加登録者は 100 名ほどであった。参加者のほとんどは FIRHM からの参加だったようで、COMCOL からの参加者はボーデメンバーが 1 名、一般の会員は数名程度であった。

今回の大会では、以下の 7 つのテーマが掲げられた。①Democracy of collecting and collections (コレクティングとコレクションの民主的考え方)、②Documenting activism (ドキュメンティング)、③Museums in dialogue with the social and political contemporary scene (現代における社会的、政治的対話をを行う博物館)、④Material and immaterial factors (有形、無形のファクター)、⑤Changing significance of heritage in changing societies (変化する社会における、遺産の重要性の変化)、⑥Linking past and present in collections and collecting (コレクションとコレクティングにおいて、現在と過去を結ぶ)、⑦Re-interpretation of collections and the issues that come with it (コレクションの再解釈とそれにまつわる議論)。

これらのテーマに基づき、以下の四つの 4 つの議論が行われた。①議論されてきた難しいストーリーについて語るために、伝統的なコレクティング、コレクションに対して博物館はどのように挑戦することができるか。②共有される遺産について、相争う感情を、博物館はどのように活用することができるか。③博物館、そのコレクションを用いて、どのように異なるコミュニティとの対話を促進することができるか。④コレクションとコレクティングは、どのように人権の促進や人権問題に取り組むことができるか。

大会の 2 日目から 4 日目には、4 件のプレナリーセッションと、21 件の口頭発表が行われた。口頭発表には、スウェーデンにおける市民主導の新規人権博物館の設立の事例報告や、会場となった Canadian Museum for Human Rights における活動の事例報告などがあった。最終日のパネルディスカ

ッションでは、参加者全体を含めて、今回の大会全体を振り返り議論が行われた。アフリカや南米からの発表応募者の中には、経済的な理由やビザの取得の都合により参加ができなかつたケースがしばしばあったとのことで、参加者の偏りについてもパネルディスカッションの中で言及された。

全体の閉会後に場所を移して行われた COMCOL の総会には、COMCOL のボードメンバー 1 名、COMOL メンバー 1 ~ 2 名を含め、10 名程度が参加した。COMCOL メンバー以外の参加が多かったため、主にメンバー以外を対象として ICOM 全体や COMCOL の活動についての概要の説明が行われた。また、ICOM 京都大会についても紹介を行った。

## 2) ICOM 京都大会の PR

最終日に 10 分間のプレゼン時間をいただき、日本における人権博物館の紹介、ICOM 京都大会のパンフレット配布とビデオ放映を行った。また COMCOL 総会では、プレカンファレンスとオフサイトミーティングの紹介を行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

今回の大会では委員長を含め京都大会担当者の参加はなく、COMCOL のボードメンバーからの参加は 1 名のみであった。大会中の打ち合わせでは、参加していたボードメンバーに京都大会全体の準備の進捗状況を報告し、オフサイトミーティングとプレカンファレンスの訪問地の希望と日程を確認した。

年次大会終了後、10/1 に国立京都国際会館で開催された国際委員会委員長会議において、2019 年 9 月 3、4 日に① CIPEG、② CIDOC、③ ICOM-CC・ICMAT との 3 つのジョイントセッションが委員長により計画されており、それぞれの日程が重複していることが判明した。急ぎ COMCOL 委員長に確認を行い、2018 年 11 月現在調整を進めている。

オフサイトミーティングについては、MIHO MUSEUM の訪問を中心に調整を行っている。プレカンファレンスについては、奈良国立博物館を中心に近隣の寺社仏閣、博物館、庭園などを訪問するプランを調整し、COMCOL の京都大会担当者と共有している。



セッション



ミュージアムツアー



ICOM 京都大会の広報



コーヒーブレイク

## 9. COSTUME

International Committee for Museums and Collections of Costume

衣装の博物館・コレクション国際委員会

**参加者名 :**

本橋弥生 (国立新美術館 主任研究員)

**開催期日 :**

平成 29 年 6 月 25 日～29 日

**実施場所 :**

London College of Fashion

ロンドン (イギリス)

**今年度年次大会テーマ :**

The Narrative Power of Clothes

(衣服のもつ物語の力について)

**概要 :**

- ・参加者数は 88 人。(過去最多) 前々回のトロント大会も多かったが 70 名程度の参加だった。
- ・当初開催地となっていたバンコクでの大会開催は国王崩御のため、中止され、急遽、ロンドンで大会が開催された。
- ・ウェルカム・レセプションは個人経営の小さな美術館、ファン・ミュージアムで行われた。非常に小さな館のため、参加者全員が参加することはできなかった。
- ・「衣装の持つ物語」がテーマとなっていたため、誰もが参加しやすいテーマであったため、発表者も 46 人と多く、かつ聞いていても興味深い内容だった。
- ・世界の様々な地域における異なる時代の衣服についての発表で、参加者全員にとって刺激的な内容であった。主な発表は下記の通り。

➤ Alexander Palmer (ロイヤル・オンタリオ博物館)

“Telling Tales: Corrections and New Directions”

ファッションではないが、歴史を語る衣服がある。最近の収蔵作品を巡り、その所有者であったハンガリーから移住してきた男性の個人的な歴史を記録するプロジェクトについて紹介。

➤ Ildiko Simonovics (ハンガリー国立博物館)

“In Search of a Legend-life and Work of Klara Rotschild(1903-1976)”

2018 年に予定している展覧会テーマについて。Rotschild は第二次世界大戦後、共産主義時代にオートクチュールをハンガリーに導入した女性デザイナー。ハンガリー国外では知られていないが、ハンガリー服飾史において重要であった彼女が行ったことを検証する内容。

➤ Chryssa Kapartziani, Myrsini Pichou (アテネ大学)

“The Narrative Power of Dress during Trials: The Practitioners of Law at Work- A Greek Case Study”

ギリシャにおける弁護士の服装に関する社会学的な調査結果について。ギリシャでは、若い法律家はスーツを着ずにカジュアルな服装の人が多い。彼らの価値観を統計を取ることで説明した。

➤ Kirsten Toftegaard (デンマーク・デザイン・ミュージアム)

“Home Diligence Sweeps Across the Country”

第二次世界大戦後のデンマークにおけるファッションに関する考察。どのように服を作り、どのような色が好まれたのかなど。

➤ Ndam Ben Yossef

“Uzbekistan, Turkumenistan, Jewish Community”

Debora Davidoff(1887-)というタシュケント生まれの裕福な商人の妻の装いの歴史を辿りながら、同地の歴史や文化、価値観の変化を紹介。

➤ Angelika Riley (ハンブルク)

“Donation: Erika Holst(1917-1947)”

2008年に寄贈を受けた一市民の衣服を巡って、彼女の個人的な歴史を掘り下げながら歴史を探る研究。

- ・コーヒーブレイクが午前中、午後と1回30分ずつ確保されていた。紅茶、コーヒー、ペイストリー、フルーツと内容も充実していて、疲れた頭を癒しつつ、参加者たちと交流する貴重な時間だった。
- ・スタジオヴィジットも、スクール・オヴ・ヒストリカル・ドレス、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム、ケンジントンパレスなど、ミラノ大会ほど多くはなかったが、充実していた。

#### ICOM 京都大会の PR :

パンフレット及びニュースレターの配布すると同時に、総会にて5分程度のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは京都大会プロモーション用ビデオの上映及び補足説明を行った。京都という都市への興味を持つてもらう良い機会となった。リクエストとして、現代と伝統をテーマにしたプログラムやバックヤードツアー、着物に関する知識を深めるプログラム、工房訪問、文化学園大学（東京）でのプログラム、個人コレクションの見学などが挙がった。

#### 年次大会参加所見（特に ICOM 京都大会へ向けて）：

（1）2019年京都大会開催にあたり、考慮すべきこと、期待すること

・3日間でのセッション開催では時間が足りないほど発表者が多い。場合によっては、発表審査を行うべきか？

- ・VISIT プログラムは人数が多いと受け入れ先との交渉が必要となる。ガイド・ツアーやバックヤード見学はたいてい人数制限をしなければならない。
- ・ついプログラムを詰め込んでしまうが、フリータイムも必要。今回、水曜日は15:30終了とした。
- ・現代のものに加え、伝統的な服飾産業や裏方の仕事を紹介するツアーをぜひ設けてほしい。

（2）理事会での京都大会への期待やアドバイス

・発表希望者の募集ははやめに。発表希望者が多い場合は、本格的な研究発表を20分、萌芽的研究発表は10分など時間に差をつけても良いのでは。通常の発表時間は今回と同様にこれまで15分としてきた。

・パワーポイントや発表原稿は早く事前に提出してもらえるようであればそのようにした方が楽。

・構成としては、3-4セッション+ヴィジットを基本とし、それに加えてエクスカーション、ポスト・コンフェレンス・ツアーや企画してほしい。

・ヴィジットは一日当たり1から2か所が適当。KCIや服飾関係の工房、個人コレクター宅訪問、伝統的な着物産業の見学などがしたい。

・想定される参加者は40名程度。

・日本語が皆できない上、日本では英語が通じないため、参加者5人程度につき1人程度のボランティア（学生でよい）がついてもらえるとありがたい。

・テーマは総会と異なるものでよい。ただし、総会のテーマもCOSTUME会員が発表しやすいテーマではあるため、この路線でも良い。今後、要検討。

・会議中、前日と後半というタイミングで2回、理事会の時間を設けること。また総会の時間も中日に設けること。

### (3) ICOM COSTUME 総会

- ・新メンバー紹介
- ・2017年度年次大会について
- ・88人参加、46の発表。

協力者への謝辞：Alexandra Kim, Matteo Augello, ロンドン・ファッション・カレッジ、ファン（扇）ミュージアム、ケンジントン・パレス、ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム、スクール・オヴ・ヒストリカル・ドレス

- ・出版物について

2016年度大会のProceedingsを2017年1月にオンラインに掲載。

ニュースレターも印刷はせず、オンラインで年に2回、発行予定。（コスト削減のため）

- ・新理事長候補の選出

⇒Alexandra Palmer（カナダ、ロイヤル・オンタリオ・ミュージアム）が他薦で選出された。2019年の京都大会前後に現理事長と交代予定。

### (4) 来年度の年次大会について（オランダ）

2018年6月10日（日）レジストレーション

6月11日（月）9:00-15:00 ペーパーセッション、夜はスタジオ・ヴィジット

6月12日（火）9:00-14:00 ペーパーセッション、夕方、セントラル・ミュージアム訪問

6月13日（水）9:00-14:00 ペーパーセッション、夕方、セントラル・ミュージアム訪問

6月14日（木）ティルブルグ・テキスタイル・ミュージアム訪問（バス）

6月15日（金）王立美術館、鞄博物館訪問

オランダにあるコスチューム系の美術館、博物館が連携して開催する来年度の年次大会は、ほぼすべてのことが1年前の本大会で決まっているようだった。



写真 1. 会場遠景



写真 2. モーニング・コーヒーの様子



写真 3. 会場の様子



写真 4. ペーパーセッション



写真 5. ケンジントンパレス訪問



写真 6. ケンジントンパレスでの収蔵庫見



写真 7. ヴィクトリア&アルバート・ミュージアム訪問



写真 8. ヴィクトリア&アルバート・ミュージアムにて開催されていたバレンシアガ展  
担当キュレーターによるレクチャー

**10. DEMHIST**  
**International Committee for Historic House Museums**  
**歴史的建築物の博物館国際委員会**

**参加者名 :**

中谷 至宏（元離宮二条城事務所／京都市美術館）

**開催期日 :**

10月10日：基調講演、セッション発表、DEMHIIST ボード・ミーティング

10月11日：セッション発表、DEMHIIST ボード・ミーティング

10月12日：セッション発表、市内見学

10月13日：エクスカーション1

10月14日：エクスカーション2

**実施場所 :**

アゼルバイジャン・カーペット博物館、アゼルバイジャン国立博物館、バクー、アゼルバイジャン

**今年度年次大会テーマ :**

**ICDAD / DEMHIST Joint Conference (ICDAD との合同年次大会**

Decorative Arts and Interiors (インテリアと装飾美術)

**プログラムリンク :**

<https://icomaz.az/en/ICDAD-DEMHIIST-Joint-Conference>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の大会は、ICDAD（装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会）との共同開催であり、14か国（アゼルバイジャン、オーストリア、イタリア、ポルトガル、ドイツ、レバノン、オランダ、日本、アメリカ、インド、エジプト、チェコ、ジョージア、トルコ）から42人の参加者があった。このうちインド、エジプトからそれぞれ1名の参加者はDEMHIISTとICOMの若手研究者の招聘プログラムの合格者としての参加であった。私自身もボードメンバーとして選定者の一人であり、それぞれの国におけるDEMHIISTの活動の活発化を促進する意味で意義ある参加であったと感じたところである。

またアクソイICOM会長も初めてアゼルバイジャンを訪問され、会期の3日間を通して大会に参加された。

本年の年次大会は、DEMHIISTとしては当初アメリカのシカゴで行うことが決定されていたが、様々な議論の後、最終的にキャンセルすることとなり、急遽ICDADの年次大会に共同参加することとなった事情もあり、残念ながら発表者、参加者に占める割合が低いものに留まった。大会は二つの国際委員会に加え、ICOMアゼルバイジャン、アゼルバイジャン共和国文科省、アゼルバイジャン・カーペット博物館が共同主催に加わり、国家的支援のもと円滑な運営が実現された。

年次大会のサブテーマは、①Textiles and interiors (テキスタイルとインテリア) ②Interior design and defining identity (インテリアデザインとアイデンティティ) ③Interior and authenticity (インテリアと真正さ) ④Metalwork and jewelry (金属工芸とジュエリー) があらかじめ提示された。

DEMHIISTにとって、DEMHIISTとして招待した基調講演者アニス・シャーヤ（レバノン大学教授）の「歴史・装飾博物館の役割：グローバリゼーションとアイデンティティの保護や場所の協同的記憶の間で」と題した講演が、歴史的場における現在の課題を明解に提起したことに加え、同じレバノ

ンからの発表者アイマン・カッセムの「住居における「ホワイト・キューブ」と事物の「パフォーマンス」について」や、インドからの発表者ムスルティ・ダスの「インドの国家的英雄ネタジ邸宅：対話を通した社会的持続性の称揚」など若手の研究者の新鮮な視点と、インドやレバノン、さらには国際大会の開催予定地エジプトなどの国における今後の DEMHIST の活動の活発化の可能性を感じさせる発表も含まれていた。

## 2) ICOM 京都大会の PR

初日の基調講演の後に総会に 10 分間のプレゼン時間をいただき、パンフレットを配布し、ICOM 京都大会の概要と京都の魅力に関するプレゼンテーションを行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

年次大会中、二日間に渡り、ボード・ミーティングを開催し、本年度の課題についての議論に加え、京都大会について議論した。論点は、①他の国際委員会との合同セッションの実施、②発表募集文の方向性、③DEMHIST のオフサイトミーティングの内容、④予算措置であった。①に関しては、CAMOC, ICAMT, ICMS とのジョイントセッションおよび共同ワークショップの実施の承認、②に関しては、キーワードの抽出と 11 月中の完成を目指すことの確認、③窓口担当者からの素案の提示と承認、④については、引き続き窓口担当者により詳細な予算案の提出が求められた。

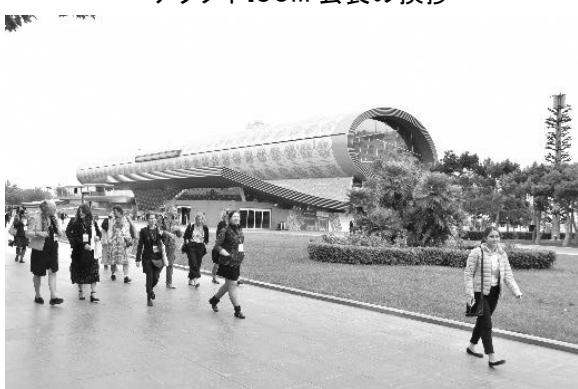
また委員長が参加した舞鶴ミーティングの報告に加え、それに先立って行った委員長のオフサイトミーティング候補地の事前訪問に関しても委員長とともに報告した。その際、委員長からは移動に関して公共交通機関利用の難しさ、個々の歴史的建造物での担当者の英語力の低さについて報告され、移動手段の検討と通訳者の重要性が確認された。



アクソイ ICOM 会長の挨拶



1 日目のセッション



カーペット・ミュージアムの外観



城壁内の旧市街見学

**11. Glass**  
**International Committee for Museums and Collections of Glass**  
**ガラスの博物館・コレクション国際委員会**

**参加者名 :**

土田ルリ子 (サントリー美術館学芸副部長)

**開催期日 :**

9月 24 日、25 日 : レクチャー (ロシアのガラスコレクション・アーティスト・科学、および各国のガラス館・展覧会の近況)、総会 (プレゼンテーション「日本のガラスの歴史とコレクション」を含む)

9月 26 日 : エルミタージュ博物館見学

9月 27 日 : Museum of St. Petersburg Stieglitz State Academy of Art and Design, Russian Museum 見学

9月 28 日 : Imperial Manufactory Museum, The Museum of Glass on Yelan Island 見学、Farewell dinner

9月 29 日 : Peterhof 見学

**実施場所 :**

エルミタージュ博物館・サンクトペテルブルク・ロシア

**今年度年次大会テーマ :**

The Glass Museums and Collections in Russia (ロシアにおけるガラスの博物館とコレクション)

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/glass/PDF/ICOM\\_Glass\\_2018\\_call.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/glass/PDF/ICOM_Glass_2018_call.pdf)

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の会議は、およそ 74 人の参加者があった。名簿上では、ロシアからの参加者 29 名、ヨーロッパ 36 名、英国 3 名、北米 2 名、南米 2 名、アジア 2 名 (うち日本 1 名)、昨年比 200% 以上、総会員の 60% 近いメンバーが集まる有意義な年会となった。

エルミタージュ博物館での開催ということもあり、9月 24 日のレクチャーでは、①Artists who worked at Russian Glass Factories I, II (ロシアのガラス工房で働くアーティスト)、②The Fate of Museums' Collection in Russia (ロシアにおける博物館のコレクションの宿命)、③Collectors and Collections in Russia I, II (ロシアのコレクターとコレクション)、④Problems of Restoration and Conservation in Russia (ロシアにおける修復保存の問題)、⑤Glass Science on Russian Collections (ロシアのコレクションにおけるガラスの科学) とのサブテーマで、15 名のロシア勢が各美術・博物館のガラスコレクションや作家活動、化学分析など、ロシアのガラスの今を紹介した。これほどロシアのガラスに関する諸事情が、一度に国際的に開示されたのは、今回が初めてであろう。各館の学芸員・研究員が、まさに所属館の威信をかけて発表された。続く 25 日には Updating on Glass, Glass Museums and Exhibitions (ガラスとガラスの美術・博物館と展覧会の現状) とのサブテーマで、ロシア以外の各国の研究者 13 名から、それぞれのガラス界の進捗報告がなされた。26 日にはエルミタージュ博物館がもつガラスコレクションを各時代専門の学芸員の解説の付きで見学、収蔵庫にも入させていただき、近代ヨーロッパ作品を直接手に取って熟観させていただいた。27 日にはガラス・磁器を学ぶロシア屈指の美術専門学校と、國家の歴史をたどるロシア美術館を見学した (ガイド付き)。28 日にも皇室工房のコレクションと、イエラン島の現代ガラス館を見学、敷地内に新設されたばかりの工房で古代ガラス復元のデモンストレーションを拝見した。最終日はピョートル大帝の夏の邸宅ペテルゴフをガイド付きで見学、壮大な規模に驚かされた。今大会は、ロシアのガラスの全貌を知る格好の機会となったばかりでなく、サンクトペテルブルクという歴史的都市を背景に、ロシアの文化遺産のスケールの大きさを痛感せら

れる年会となった。

## 2) ICOM 京都大会の PR

総会で「History of Japanese Glass and Collections in Japan (日本のガラスの歴史とコレクション)」と題し、15分強のプレゼンを行い、京都大会のパンフレットも配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

ヨーロッパを中心とする Glass のメンバーにとって、残念ながら日本のガラスの認知度は低く、ガラスコレクションについての情報も充分行き渡っていない。上記のプレゼンでは、江戸期のガラスの成立とヨーロッパとの関係の深さを強調し、浮世絵の画像も交えて興味を促し、京都からアクセスできるガラスコレクションや工房を示した地図資料を配布しながら、京都大会に参加した場合に見られ得る作品を紹介した。プレゼン後には、「面白かった」、「遠いからと思っていたけれど見に行きたくなつた」、「バケーションを取つて参加する」、「館で予算を確保するよう努める」、「京都に行く前か後にあなたの美術館にも寄る」など、参加への前向きな声もいただいた。多くはミラノ大会から3度連続でお会いしている方々によるもので、時間とともに関係性を築くことができつつあることも実感した。逆に、京都大会が終わつてからも、Glass の年会に参加し続ける意志があるかと問われる場面もあった。

コレクションの地理的事情から、大会後半のエスカーションとオフサイトミーティングを合わせ、富山・金沢を訪れる案が濃厚となつた。また日本ガラス工芸学会等にも声をかけ、各館のコレクションについてプレゼンする国際的な機会の重要性も促し、参加者増に努める。今後はこちらで大枠のスケジュールを組み、Glass 事務局とメールにて意見をすり合わせながら、訪問館への依頼も進める予定。



開会式の挨拶:(Glass 委員長とエルミタージュ博物館館長)



エルミタージュ博物館収蔵庫内の見学



イエラン島の新しいスタイリッシュな工房見学



総会:京都大会に向けてのプレゼンテーション

**12. ICAMT**  
**International Committee for Architecture and Museum Techniques**  
**建築と博物館技術国際委員会**

**参加者名 :**

大原 一興 (ICAMT 理事、京都大会窓口担当)

横浜国立大学 大学院都市イノベーション研究院

**開催期日 :**

9月 6 日-8 日 : 年次大会 (セッション発表、現地見学、レセプションと理事会)

**実施場所 :**

エスポー市博物館、群島博物館、AMOS-REX 美術館、新聞博物館、ヘルシンキ市博物館・エスポーおよびヘルシンキ・フィンランド

**今年度年次大会テーマ :**

Museum Architecture, Exhibition Techniques & Exhibitions Design (博物館建築、展示技術、展示デザイン)

**プログラムリンク :**

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/icamt/ICAMT-YEARS/2011\\_-\\_2020/2018/2018\\_Espoo\\_and\\_Helsinki/2018\\_Espoo\\_1\\_Documents/Conference\\_Program\\_31.08.18.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/icamt/ICAMT-YEARS/2011_-_2020/2018/2018_Espoo_and_Helsinki/2018_Espoo_1_Documents/Conference_Program_31.08.18.pdf)

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の会議には約 60 名の参加者があり、14 か国からの参加であった。開催国フィンランドを含みヨーロッパからの参加者が多数を占めたが、ブラジルからも 7 名ほど、アジアからはタイランドから 5 名、韓国 1 名、日本からは学生 3 名を含み 4 名であった。

3 日間それぞれ会場を移して博物館の視察とディスカッションを行った。

1 日目はエスポー市の複合型の博物館 WeeGee で、大会の開会と ICOM フィンランド委員長他のフィンランドの博物館の最近の取り組み等の報告があり、その後一時バスで移動して国立公園に隣接する木造建築の自然環境センター Haltia における展示教育活動を学び、エスポー市博物館では、近代に大きく都市化が進んだ地域の課題を展示する試みについて理解を深めた。理事会を開催した。

2 日目はチャーターボートで 1.5 時間ほどの距離にある島まで行き、エスポー市が群島博物館として保全管理する、18 世紀からの建物や民家、漁師小屋、農場、散策路などを見学し解説を受けた。市内に戻ってからは、開設して 1 週間の保存建物を改修し市民の広場と一体的に整備した新しい美術館 AMOS Rex に行き、建築設計者からの解説とオープニングを賑わせている日本のデジタルアーティスト teamLab による没入型展示を楽しんだ。ヘルシンキの中心部の新しい名所として有意義なプロジェクトである。この日の夕方にはその保存建物内のレストランにおいて食事を楽しみ懇親を深めた。

3 日目は新聞博物館 Päivälehti museum の講堂で、研究発表の時間をまとめてとった。最初にブラジル国立博物館火災の紹介があり、関心と復興支援への取り組みを投げかけた。研究報告は 8 題あり、事例発表、現代の課題、計画案、評価と分析など、多様な視点からの報告が刺激的であった。その場で、来年の京都大会の案内をおこなった。その後にヘルシンキ市博物館を訪問し、最近統合しリノベーションされた博物館建築と同時代的な展示のあり方を議論した。

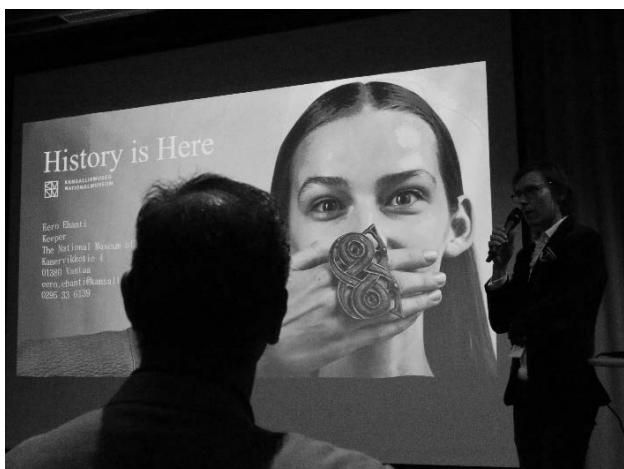
いずれもすばらしい環境の中に建つ博物館で、それぞれが特色ある活発な活動をしていたのが非常に刺激的であった。

## 2) ICOM 京都大会の PR

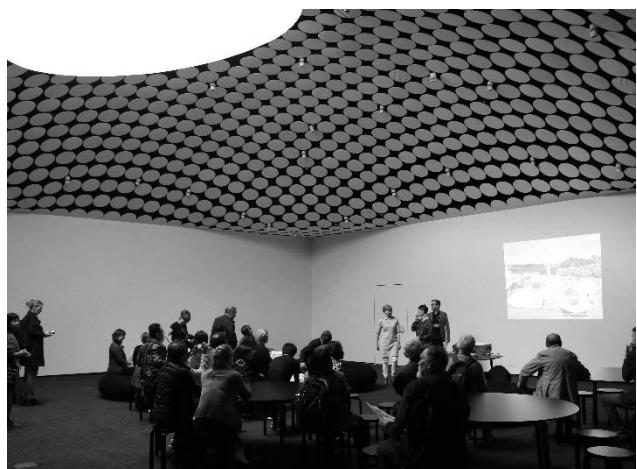
パンフレット及びニュースレターを配布した。研究発表の時間帯で 10 分程度の時間をいただいてプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは ICAMT で予定している見学先の紹介や京都大会プロモーション用ビデオの上映などに関する補足説明をおこなった。多くの参加者が大変関心をもち、来日へ期待をもっていることがわかった。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

京都へはかなり多くの関心があり、また、参加を予定しているとの返事も得られたが、遠いことと予算上の確約がまだとれていないことなど、未確定の部分も多い。参加者からの主な質問は、京都は非常に広くて、200 も博物館があるならどこをどう見たら良いのか、またどこに泊まつたら効率的なのか、という心配があり、それについては、大会の事務局の旅行関係情報に頼ってもらうように伝えた。建築物については、担当者からできるだけ情報を提供する予定である。建築向けのポストカンファレンスツアーの要望も強かった。企画については理事会で議論し、ICOM-CC、COMCOL、DEMHIIST とのジョイントは好評に受け入れられ、視察先の候補についても概ね賛同されたが、エクスカーション先は予算との兼ね合いで、旅行社からの見積もりなどさらに検討を進める必要がある。実現できない点についてはポストカンファレンスツアーで対応することも考えられる。学生コンペについては担当者で煮詰めることとし、実行する方向性で検討をすすめることとなった。



ICOM フィンランド会委員長によるプレゼンテーション



訪問先博物館でのディスカッションの様子



京都大会を PR する様子



エクスカーションでの説明

### 13. ICDAD

ICOM International Committee for Museums and Collections of Decorative Arts and Design

工芸とデザインの博物館・コレクション国際委員会

参加者名：マリサ・リンネ

(京都国立博物館)

開催期日：

10月10日～12日（全日程参加）

実施場所：

アゼルバイジャン絨毯博物館、アゼルバイジャン

国立美術館

(アゼルバイジャン、バクー市)



Iアゼルバイジャン、バクー市  
バクー操人形劇場での歓迎レセプション

今年度年次大会テーマ：

「Decorative Arts and Interiors」

(工芸とインテリア)

概要：

2018年10月10日～12日アゼルバイジャンのバクー市にてICDAD（工芸とデザインの博物館・コレクション国際委員会）とDEMHIIST（歴史的建築物の博物館国際委員会）が合同年次大会を開催した。スアイ・アクソイ会長も参加され、参加者を迎えた。企画はアゼルバイジャン絨毯博物館による「Decorative Arts and Interiors」（工芸とインテリア）をテーマに、アゼルバイジャンの絨毯や刺繡をはじめに、日本の製裘、フランスのタペストリー、ジョージアや東ヨーロッパ・中近東の金工品・ポルトガルの屏風などについての基調講演・セッション・発表が行われた。年次大会の後、シルクロードのシェキやゴブスタン、アブシェロンの文化地域の視察が2日間のポスト・コンフェレンス・ツアーとして行われた。

**ICOM 京都大会の PR：**日本からの運営委員二人、DEMHIIST連絡窓口中谷至宏氏及びICDAD連絡窓口マリサ・リンネがそれぞれ京都大会について発表した。

年次大会参加所見（特に ICOM 京都大会へ向けて）：

今回の年次大会はホスト博物館の館長によって企画されたこと也有って、しっかり構成されていた。コーヒーブレークやランチ、また夜のレセプショ



アゼルバイジャン国立美術館にての研究発表



アゼルバイジャン絨毯博物館にての  
ICOM 京都大会に関するPR発表

ンが毎日発表の間や後にあって、誘導や通訳のスタッフが多数ついており、午後の視察では、バスや英語話すガイドが當時ついていた。つまり、年次会議の実際の基調講演やセッション以外のもてなしが印象深かった。



ICDAD ボードメンバー



ヘイダル・アリエフ・センター



ノーベル兄弟家博物館



シェキ



アブシェロン



アブシェロンにて

**14. ICEE**  
**International Committee for Exhibitions and Exchanges**  
**展示・交流国際委員会**

**参加者名 :**

渡辺 友美（お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター 特任講師）

**開催期日 :**

11月11日：レセプション、見学（Caixa Forum Madrid）

11月12日～13日：ICEE ICFA ジョイントセッション、レセプション、見学（ティッセン-ボルネミッサ美術館、プラド美術館）

11月14日午前：ICEE ICFA ジョイントアクティビティ（ソフィア王妃芸術センター）

11月14日午後：ICEE 移動&アクティビティ（カタルーニャ美術館）

11月15日：ICEE セッション、総会

11月16日：ワークショップ、ネットワーキングイベント（コスモカイシャ）

11月17日：エクスカーション

**実施場所 :**

Caixa Forum Madrid・マドリード・スペイン、Caixa Forum Barcelona・バルセロナ・スペイン

**今年度年次大会テーマ :**

Cultural Heritage – Transition and Transformation（文化遺産：変遷と変容）

プログラムリンク：<https://static1.squarespace.com/static/590ce162db29d6aee916a1ff/t/5be1b1b1352f53860d7726d7/1541517746174/ICEE+ICFA+programme+A4+4pp+100%25+revA.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今年度の年次大会前半は ICEE と ICFA（美術の博物館・コレクション国際委員会）の合同開催で、両委員会合わせて 163 名が参加した。ICFA の個別セッションは 20 名程度だったと聞いたので、140 名近くは ICEE からの参加者であったと考えられる。ヨーロッパを初め、北米、アフリカ、アジア地域を含む全 38 か国からの参加があった。

報告者は 11 月 12 日より 17 日までのプログラムに参加した。11 月 12 日～13 日に行われた合同セッションは、大会メインテーマ「Cultural Heritage – Transition and Transformation（文化遺産：変遷と変容）」より派生した 4 つのサブテーマ：① Cultural Heritage for Social Engagement（社会との関わりのための文化遺産）、② Cultural Heritage in the Digital World（デジタル世界の文化遺産）、③ Cultural Heritage, Display and Preservation（文化遺産の見せ方と保存）、④ Creating Legacy through Cultural Heritage（文化遺産を通じたレガシーの創造）に沿って構成され、合計 17 件の発表があった。これまでの ICEE 大会では、あまり館種を絞り込まず、展示開発の技術や巡回の技術に関する議論もされていたが、本年の議論はテーマが Cultural Heritage であること、ICFA との共同開催であること等から、美術館の話題や博物館の社会参画、事例紹介の話題が多く、広く応用可能な展示技術に関する話題は少なく感じられた。同様に、訪問する博物館もほぼ全てが美術館であり、例年に比べて偏りを感じた。最も、展示交流という意味では美術作品の交流が最も盛んであるはずなので、本年の ICEE の判断は妥当なものだったのかかもしれない。

バルセロナに移動し開催された 15 日の ICEE 個別セッションでは、サブテーマとして⑤Cultural

Heritage and Innovation（文化遺産と革新）と題し、6件の発表が行われた。総会を挟み、午後には新しい巡回展やアイデアの共有を目的とした ICEE 恒例の Marketplace of Exhibitions and Ideas（展示の見本市）セッションが設けられ、20件の発表があった。発表の多くは巡回展の企画開発会社による新作の発表や、規模の大きい博物館が展開する巡回展の告知であった。報告者も本セッションで、研究を主眼に置いた小規模巡回展のアイデアを発表した。終了後の反応を見ると小規模巡回展のニーズは多く、本セッションを初めとする ICEE の議論が大型企画展に偏っているという意見もあった。

16日のワークショップでは、博物館同士或いは異業種間コラボレーションの開発等について、事例報告を中心に議論が展開された。17日のエクスカーションはバスで近郊都市を訪問予定だったが、会場で配布された最終プログラム上では各自で市内見学に急遽変更されていた。

ICEE は、1980 年の創設以来順調に会員数を増やしており、特にこの 3 年間の増加は著しい。2015 年の個人会員数は 278 名であったのに対し、2018 年には 606 名にまで増加している。その背景には、知見の共有とネットワーキングを主目的とした毎年の年次大会に加え、昨年度より開始した Webinar（オンライン上で実施する ICOM 会員限定の無料セミナー）や SNS の積極的な活用等、活発なアクティビティがある。展示業者の参加も多く、スポンサー料による食事やコーヒー、移動手段の提供等、資金面でも活発な運営をできているようである。

## 2) ICOM 京都大会の PR

総会で 10 分間のプレゼンテーションを行い、合わせてパンフレットとニュースレターを配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

京都大会について、多くの参加者よりぜひ参加したいとの反応を得た。一方で、大会公式の渡航費援助には年齢制限があること等から、発展途上国より参加を希望する人にとって資金面の確保が課題のことだった。委員長をはじめとするボードメンバーは 2018 年大会の運営で忙しく、京都大会のテーマや内容はそれらが落ち着いてから検討を開始したいとの考えであった。窓口担当者として、オフサイトミーティングについての必要事項を伝え、引き続きメール等でやり取りすることを確認した。



前半の会場となった Caixa Forum Madrid



開会式の様子(委員長の会議趣旨説明)



総会で京都大会を PR する様子



博物館見学の様子

**15. ICFA**  
**International Committee for Museums and Collections of Fine Arts**  
**美術の博物館・コレクション国際委員会**

**参加者名 :**

青木 加苗 (和歌山県立近代美術館)

**開催期日 :**

11月11日 : ウェルカムレセプション

11月12日～13日 : ICEE ICFA 合同セッション

11月14日 (午前) : ICEE ICFA 合同アクティビティ (ソフィア王妃芸術センター観察)

11月14日 (午後) : ICFA 個別セッション

11月15日～17日 : ICEE 個別セッションおよびポストカンファレンスワークショップに参加

**実施場所 :**

CaixaForum Madrid・マドリード・スペイン (ICEE ICFA 合同セッション)

Goethe Institute Madrid・マドリード・スペイン (ICFA 個別セッション)

CaixaForum Barcelona・バルセロナ・スペイン (ICEE 個別セッション・ポストカンファレンスワークショップ)

**今年度年次大会テーマ :**

Cultural Heritage: Transition and Transformation (文化遺産 : 変遷と変容)

**プログラムリンク :**

<https://static1.squarespace.com/static/590ce162db29d6aee916a1ff/t/5be1b1822b6a287a7ae15b98/1541517700400/ICEE+ICFA+programme+A4+4pp+100%25+revA.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の大会は ICEE (展示・交流国際委員会) との合同開催で、全体の参加者は 38 か国から 163 人であった。しかしそのうち ICFA の個別セッションに参加したのは 20 人足らずで、ほとんどは ICEE の参加者であったと言える。特に ICFA はボードメンバーの何人かが欠席し、小規模の開催となった。また ICFA 参加者のうち、報告者以外はすべてヨーロッパからの参加であった。

12 日、13 日は合同セッションとはいえ、ICFA が率いた部分は基調講演者ひとりの紹介を委員長が行ったのみで、ほぼ ICEE によって運営された。またサブテーマには ①Cultural Heritage for Social Engagement、②Cultural Heritage, Display and Preservation、③Cultural Heritage in the Digital World、④Creating Legacy Through Cultural Heritage の 4 つが据えられたが、発表内容もすべて ICEE が招待、採択したものである。そこで話題は、巡回展の実績紹介が中心であり、かなり面食らった部分もあるが、実際のところ ICEE は日本語では展示・交流国際委員会と訳されているものの、正式には International Committee for Exhibition Exchange、つまり「交換展の委員会」であることに気がついた。

展覧会が巡回の催し物と看做される状況は、日本特有の事情であると考えていたが、最近では欧米の大型ミュージアムがこぞって各地に企画を売り込む状況が生まれている。日本では数としては多くはないが、ロックスター展と呼ばれる一部の大型展に大金がつぎ込まれる状況にあり、その金額も高騰していると聞く。しかし現在の市場は日本だけではない。むしろ博物館ブームに湧く中国が、積極的に巡回展を購入していることも、要因としてはあるようだ。この状況は、豊富なコレクションを持つメガミュージアムが売り手として儲け続ける仕組みを生んでいるが、所蔵品の貸出しによって利益を得ることは、ICOM の倫理に反する。そのため表向きには「借用料」ではなく「事務手数料」

として費用を徴収しているが、発表者の口から「貸出料」という言葉が出た際、会場からの指摘に対して慌てて訂正する危うい場面も見られた。また展覧会の企画会社が ICEE のメンバーに入っており、それが会合のスポンサーとなっていたことも、利害関係者との付き合い方として疑問を感じた。

この状況を ICFA は現代のミュージアムが抱える問題のひとつだと捉えている。商業的な価値付けに偏りがちな昨今の巡回展は、ミュージアムの本来のあり方と相容れない部分があるからだ。コレクションを恒久的に展示するミュージアムと、資料を移動させる展覧会の齟齬については、ヨーロッパでは戦前から大きな議論があったが、この歴史的背景について ICFA 個別セッションにおいて、ICFA 前委員長がテーマを変更して発表した。その中で、ICEE と ICFA はともに 1980 年のメキシコ大会で設置された委員会であるが、その出発からすでに、調和できない部分があったことが明らかになった。

なお報告者はこの ICFA 個別セッションにおいて、*Seitaro Kitayama and the Reception of Western Art: Modification of its Meaning through Presentation* と題して発表を行った。ヨーロッパ中心の美術史を拡張することもまた、ICFA の目下の課題として位置づけている。

セッションに引き続き行った総会においては、今回、より強く意識された ICFA 独自の今後の方針を話し合った。そして世界に開かれた ICFA を目指して、ICFA の定義についても現在更新作業を進めしており、取り急ぎ日本語のページでも「19 世紀以前までの美術」という記述を削除した。京都大会で新定義を正式に採択する予定である。また、より活発な活動を目指して、報告者を含めて新たに 3 人のボードメンバーが追加選任された。

15 日からは ICFA のメンバーとして唯一、ポストカンファレンスプログラムに加わった。ICEE 大会の恒例となっている「Marketplace of Exhibitions and Ideas」に参加することができたが、これは展示に関するアイデアの共有というより、むしろ明確に、販売可能な巡回展のアピールタイムであった。この状況についての懸念を参加者の何人かとも議論したが、問題意識の共有は難しいとも感じた。

## 2) ICOM 京都大会の PR

会期中に出会った参加者に、個別にパンフレットを配布した。ICFA 総会においてはトレイラーを流し、10 分程度の発表を行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

ICDAD と GLASS との合同開催を予定しているが、今回の経験をふまえて、独自のセッションを設ける必要性を確認した。テーマの棲み分けや ICFA としての活動方針を明確に発信していく。他の委員会に比べて多くの参加者が見込まれるわけではないため、セッション日を一日、近隣の美術館見学に充てることも検討している。より密な連携のために、4 月頃に 1 度、ボードミーティングをヘルシンキで開催する予定である。



合同セッションにはアクソイ会長も参加



ICFA 総会において、ICFA 定義の修正を検討

## 17. ICMAH

### International Committee for Museums and Collections of Archaeology and History

考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会

#### 参加者名：

岡村 勝行 (ICOM2019 運営委員、ICMAH 日本窓口)

公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

#### 開催期日：

10月10日：年次大会（開会式・基調講演・セッション発表）、博物館見学

10月11日：セッション発表、博物館見学

10月12日：セッション発表、博物館見学

#### 実施場所：

ペラ美術館・イスタンブール・トルコ

#### 今年度年次大会テーマ：

Corporate Museums (企業博物館)

#### プログラムリンク：

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/icmah/publications/ICMAH2018\\_conference\\_12\\_062018.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/icmah/publications/ICMAH2018_conference_12_062018.pdf)

#### 年次大会概要及び参加所見：

##### 1) 年次大会のテーマと内容

今回の会議は、コアなメンバー30名弱のほか、入れ替わり、学生参加者を含め、全体でおよそ80名の参加者があった。参加者の多くはトルコからで、そのほかフランスからの参加者が目立った。

初日午前は、ペラ美術館長、ICOM トルコ会長代理、ICMAH 会長の挨拶による開会式のあと、企業博物館の現在と課題に関する基調講演、午後からは研究報告が行われた。二日半のプログラムは、①「The origins of the corporate museum (企業博物館の始まり)」、②「Building and maintaining corporate collections (企業博資料を構築し、メンテする)」、③「Corporate museum; museum of know-how (企業博物館のノウハウ)」、④「What repercussions for the company and the territories? (会社、その関連領域にどのような反響があるか)」、⑤「Challenges of professionalization 職業化にあたっての課題」の5つのセッションに分かれ、13本(19名)の発表があった。国別では、フランス、トルコ、セルビア、イスラエル、コロンビア、エジプト、日本の7か国で、一人30分ほどの発表時間があり、セッション最後の議論を中心に余裕をもった構成であった。企業博物館のケース・スタディは、オリエント急行博物館、銀行、貨幣、航空機、紙、ダイアモンド、オリブ、郵便、羊毛織物、スポーツクラブ、企業所蔵美術コレクションなど多様で、そのほか、メルセデス、ポルシェ自動車博物館を素材に、その建物、デザインに企業アイデンティティの表現を検証する建築学的考察もあった。また、日本からは企業博物館全般と産業文化博物館コンソーシアム (COMIC) の活動の発表があり、京都大会に関連し、関心を集めた。セッション最後には、公立館に見られない斬新性の一方で、企業経営と密接に関連する博物館運営、資料散逸のリスクなど企業博の現状と課題を巡り、質疑応答、ホットな議論が展開した。

夕刻は Besiktas スポーツ博物館、イシュ銀行博物館など5館を見学し、それぞれの学芸員と意見交換した。スポーツ博は百年以上の歴史をもつ地元クラブの企業博物館。近年その新装し、制作に関わった Madran 事務局長の案内で、子供用の仕掛け、誘導用ブロック、触れる展示などの障害者対応、VR 体験、さらにカラオケボックス（応援歌を歌うため？！）まで最新設備が備えられ、人気企業の

施設ならではの大膽な取り組みを拝見した。

## 2) ICOM 京都大会の PR

サーティー、ニュースレターを事前にバッグに同梱してもらい、大会二日目に20分間もらって、パワポ、ビデオで準備状況に加え、オフサイト会場候補の大歴博の説明を説明し、全体の質疑応答を行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況（400字程度）

Deledalle 会長、Madran 事務局長と、①会場の確認、②京都大会でのテーマとスケジュール、③オフサイト・ミーティングの内容、を中心に打ち合わせを行った。①については、3日目に会場が国際会館から稻盛記念会館に移る現在の案について、次期委員の選挙と重なり、出席者減少の懸念が示された。会場変更の利点（関連イベントの開催、ソーシャルイベントとの連続性、日博協大会との関係など）を再度説明し、最終的な判断を詰める必要がある。②テーマについては、「考古学」に絞り、日本の関係者を促すトピックを求められ、ブレインストーミング的な議論を通し、「教育」、「コミュニティ」など含むポイントを箇条書きにまとめた。文章化への協力を依頼された。発表数は大会中20本までで、日本あるいはアジアから6~8本が期待された。③については、大歴博での学術交流をメインとし、難波宮跡、大阪城視察など含んだ案を検討し、プログラムの雑形を作り上げることができた。



基調講演と会場の様子



セッション討論(左端が Deledalle 会長)



京都大会の PR



エクスカーション・スポーツ博での VR 体験

**18. ICME**  
**International Committee for Museums and Collections of Ethnography**  
**民族学の博物館・コレクション国際委員会**

**参加者名 :**

飯田卓 (国立民族学博物館)

**開催期日 :**

10月9日-12日 : 年次大会 (セッション発表とレセプション、国立博物館バックヤードツアーアー、スター・ディー・トリップ (セト・ランド、ペイプシ・ランド、タルトゥ市立博物館)、総会)

10月13日-15日 : ポスト・カンファレンス・ツアーアー (タリンならびにヘルシンキ (フィンランド)、ただし報告者は参加できず)

**実施場所 :**

エストニア国立博物館・タルトゥ・エストニア

**今年度年次大会テーマ :**

Re-imagining the Museum in the Global Contemporary (グローバルな同時代に博物館を再想像する)

プログラムリンク : <http://enmconferences.ee/program>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

今回の会議には、90人の参加者があった。ヨーロッパからは73人 (うちエストニアから27人)、アジアからは7人、北米からは6人、アフリカからは2人、太平洋からは2人であった。

9-12日の年次大会プログラムは、主テーマ「Re-imagining the Museum in the Global Contemporary (グローバルな同時代に博物館を再想像する)」に関わって、4つの基調報告と11のセッションが企画された。基調報告の題目と発表者は、①From 'a Place for All of Us' to a Place that Explores 'What It Is to Be Human': Museums in the Age of Global Mobilities (Andrea Witcomb, Deakin University, Australia)、②Spaces of Care: Rethinking the (Ethnographic) Museum in the Global Contemporary (Wayne Modest, Research Center for Material Culture, Netherland)、③Conceptualising Curatopia (Philipp Schorch, State Ethnographic Collections of Saxony, Germany)、④Searching for Cultural Participation in Museum Practice (Pille Runnel, Estonian National Museum, Estonia) だった。セッションの題目は、①Museums and the World at Stake (ミュージアムと岐路に立つ世界)、②Cooperation and Partnership (協業とパートナーシップ)、③Migration and Belonging (人口移動と関係性)、④Museums and the Digital (ミュージアムとデジタル技術)、⑤Object Focus (モノへの着目)、⑥The Affective Museum (感性のミュージアム)、⑦Collections, Representations and Cultural Dynamics (収集と表象と文化の動態)、⑧Visitor Engagement (来館者の参加)、⑨Ownership: Whose Knowledge Whose Truth? (知識と真実は誰のものか)、⑩Museums and Stakeholders (ミュージアムをめぐる利害関係)、⑪Shared Knowledge, Shared Power, Shared Authority (知識とパワー、権威の配分) だった。このほかに5件のポスター発表もあった。

総会では、国際委員会の名称を変更し、これまでの Ethnography に加えて Diversity and Indigenous People の語を後に続ける名称が提案された。この提案は、電子メールなどを通じて継続的に議論される予定である。この提案は、今回の会議で盛んに議論されてきた下記の動向を反映していると思われる。

民族誌博物館はこれまで、個別の文化の固有性を理解させることを通じて、人間文化の多様性の理

解を来館者に促していくことを努力してきた。その努力ももちろん継続されているが、上記の基調報告の題目やセッション題目から類推できるとおり、グローバル化にともなう経験の共有を通じて「多様性という共通意識」を広めていくという姿勢が顕著である。こうした、相対主義と普遍主義に折り合いをつけるための試行錯誤は、民族誌博物館にかぎらず個々のミュージアムすべてが直面しうる課題であり、京都大会のテーマである「文化のハブ」として各ミュージアムが信頼を得ていくためにも、京都大会であらためて検討されてよい課題であろう。

## 2) ICOM 京都大会の PR

黒岩啓子理事が、京都国際会議場での ICME 関連行事と国立民族学博物館でのオフサイトミーティングについて、総会の冒頭で説明した。京都大会に関するビデオ上映とパンフレット配布も行なった。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

いっぽう 2019 年京都大会における ICME の活動予定の概要は、すでに舞鶴会議 2018 の開催時、Viv Golding 委員長と黒岩啓子理事、吉田憲司国立民族学博物館長ならびに報告者 飯田卓の 4 名で話しあい、CIMCIM との合同でのオフサイトミーティングを国立民族学博物館（大阪府吹田市、飯田が所属）で開催する方向で議論した。2018 年の ICME 年次大会では、この案が了承され、2019 年年次大会のテーマも「Diversity and Universality」とすることが了承されている。具体的なプログラムも、CIMCIM で了承されればほぼ実現する見通しとなっている。来年に向けては、黒岩理事を中心に複数の理事が構成する年次大会委員会が、プログラム作成や発表募集、次期理事候補者の募集、広報などの作業をおこなう。



ICME 総会における、委員会の立ち位置に関する議論



エストニア国立博物館ヘリテイジ・センターでの説明



大会場だったが客席と舞台の距離は近かった



発表者を舞台に迎えての質疑応答

## 19. ICMEMO

### International Committee of Memorial Museums in Remembrance of the Victims of Public Crimes: 公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会

#### 参加者名：

東 自由里（ひがし・じゅり 京都外国語大学）

#### 開催期日：

10月12日：役員会、特別展示、常設展示視察、レセプション（テル・アビブ大学構内）

10月13日—16日 年次大会、総会（セッション発表、アイヒマン裁判常設展示視察）

10月17日—18日 エクスカーション

#### 実施場所：

ディアスポラ博物館・テルアビブ・イスラエル

マスマホロコースト博物館・テルアビブ・イスラエル

ヤド・ヴァシェム国立記念博物館・エルサレム・イスラエル

イスラエル博物館・エルサレム・イスラエル

アトリット抑留博物館・北西部ガリラヤ・イスラエル

#### 今年度年次大会テーマ：

Memory, Art, and Identity (記憶、芸術、アイデンティティ)

#### プログラムリンク：

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/icmemo/pdf/2018\\_conference/ICMEMO\\_2018\\_v10.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/icmemo/pdf/2018_conference/ICMEMO_2018_v10.pdf)

ICMEMO Facebook リンク <https://www.facebook.com/ICMEMO/>

#### 年次大会概要及び参加所見：

##### 1) 年次大会のテーマと内容

今年度のイスラエル年次大会登録参加者は約50人、エルサレムとテルアビブ二つの都市で開催された。アフリカからの参加はなく、多くは欧米からであり、ラテンアメリカはメキシコとコロンビア、アジアは台湾と日本からの参加であった。直前になってバングラデッシュ及びカンボジアからの発表者が参加できることになったため、プログラムの少し変更をせざるを得なかつたが、その他は予定通りに実施された。大会は博物館関係団体の他にイスラエル教育省、外務省、ICOM イスラエル委員会の協力を得て開催された。

大会全体の主テーマは①「記憶・芸術・アイデンティティ」であったが、二つのサブテーマ②「記憶の構築と国際法廷」、③「国際的な視点からみたアイヒマン裁判」が視察先の常設展示に合わせて設定され、それぞれのテーマに沿ったセッションが開催された。

ユダヤ教徒にとって金曜の夜から土曜の夜にかけては「シャバット」である。移動手段が心配されたが10月13日（土）の役員会議（ボード会議）には関係者全員が出席することができた。初日からテルアビブ大学構内にあるディアスポラ博物館をキュレーターによる案内で5歳から12歳向けの「ヒーロー」；成人向けの「シナゴーグの過去・現在・未来」の二つの常設展示、特別展示「ユダヤ人とユーモア」を視察しながら意見交換をした。夕刻からレセプションがあり参加者と交流が早い段階からできたのは良かった。

10月14日（日）—15日（火）はマスマホロコースト博物館で開催された。ダリット・アトラクチ氏（イスラエル教育省）、ICOM本部よりスアイ・アクソイ会長代行エマ・ナルディ教授（財務

SAREC 担当)、ICMEMO 国際委員会のオフィリア・レオン委員長、そしてマスア国際ホロコースト・インスティテュート会長が開会の挨拶を行った。メモリアル研究の第一人者、ジェームズ・ヤング博士が数多くの記念碑の映像をみせながら大会テーマにあわせて基調講演を行った。セッションの中で特に印象が残っている発表を一つ挙げるとすれば、イスラエル出身の漫画家ミシェル・キシュカ (Michel Kitchka) による「第二世代」である。ブーフェンヴァルト強制収容所から生還した父親との関係をコミカルタッチで描くようになった経緯を紹介しながら、トラウマに満ちた記憶を後世に引き継いでいくことの難しさを明らかにした。マスア国際ホロコースト博物館常設展示「憎悪の生産：反ユダヤ人と人種差別の 100 年」を視察した際、参加者からイスラエルにおけるパレスチナ人に対する人種差別の問題にも向き合う必要があるのでは、という意見がでた。この点については 17 日 (木) にイスラエル博物館で視察したアラブ系とユダヤ系の若者向け教育プログラムを視察した際にさらに議論を深めることができた。

## 2) ICOM 京都大会の PR

年次大会中に 15 分間のプレゼン時間をいただき、PPT を使用して京都大会の説明及び質疑応答を行った。窓口担当者がパンフレットは大会受付で参加者に声をかけながら一人ずつ手渡した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

宿泊に関する候補は早い時期から担当者がリストアップしており、情報は共有されている。航空運賃、大会参加費で出費が重なり、可能な限り長期滞在者向けの安価な宿を確保する必要があるためである。オフサイト・ミーティングは広島平和記念資料館で開催されることが決定しており、広島での基調講演者も決定している。ICOM 京都大会参加者だけではなく地元広島市民や中国地方の博物館関係者にも広島での参加を促すためにメディア関係者の協力が必要であることが役員会議で確認された。

イスラエル年次大会直後から京都大会に向けてのタイムスケジュールを役員一同で確認しあったが、合同セッションを少なくとも一つ設けた方がいいという意見が多く、今のところ Federation of International Human Rights Museums (FIHRM) と組むことになっているが他の IC にも打診中である。



ヤド・ヴァシーム国立記念博物館



イスラエル博物館  
アラブ系、ユダヤ系の若者向け  
教育プログラムを視察



マスアホロコースト博物館集合写真

**20. ICMS**  
**International Committee for Museum Security**  
**博物館セキュリティ国際委員会**

**参加者名 :**

前田 裕美（浦賀ドック野外船舶技術博物館設立会議）

**開催期日 :**

9月16日-19日：年次大会（執行役員会、セッション発表、レセプション、ビジネス・ミーティング）

9月20日-21日：ワークショップ、9月20日-22日ポスト・コンフェレンス・ツア（マサイマラ）

**実施場所 :**

ケニア国立博物館・ナイロビ・ケニア

**今年度年次大会テーマ :**

Disaster Planning（災害対策及び防災計画）

**プログラムリンク :**

<http://icms2018.museums.or.ke/wp-content/uploads/2018/09/Conference-Program-1-final.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

会議は、本大会3日間、アフリカ向けワークショップ2日間で構成されており、参加者は欧州・米国・中国・日本等を含めて約40名で地理的要因もありICMS側の予想より少ない人数であった。ポスト・コンフェレンス・ツアの参加者は日米中から5名であった。ワークショップは自然及び人的災害について研修を行い、災害対応計画を作成することを目的とし、アフリカ諸国の博物館から約25名の参加者があった。尚、本年は執行役員の田氏（中国）、Florjanowicz氏（ポーランド）は欠席であった。

会議初日は、ICOMケニア等の開会の辞の後、中庭で歓迎レセプションが行われた。セッション前にはICMS会員約20名による簡単な自己紹介がマイクを回しながら行われた。ビジネス・ミーティングでは諸報告、監査報告、2019年会計予算案等が承認され、ICOM京都大会のプレゼンテーションが行われた。

第二日以降のセッションでは、オランダ国立博物館、英国V&A美術館、ロサンゼルス美術館、ムンク美術館等欧米の博物館・美術館実務者による組織内での災害・防犯等対策をセキュリティ・マネジメント・レベルから捉えた事例発表、そして、オランダ政府の文化財保護官によるセキュリティの展望と題した学術的な発表もあった。その他、米国からは博物館事件事故年報の発表があった。全発表者15名中、7名がアフリカ諸国からの発表であった。その主な発表はケニア国立博物館のセキュリティの現状、ナイロビ大学教授や東アフリカ研究所所長などアフリカ諸国の博物館に災害対策及び計画が不十分であるということをディスカッションした。アフリカ側の発表には実務者による事例報告が少なかった。また、アジアからは、京都大会PRのための発表と中国の民間セキュリティ関連企業1社による発表があった。第三日目は、収蔵庫、保存修復室、展示室の見学が行われ、第四日目は、博物館内を3グループに分かれて、防火、建物、セキュリティの観点からセキュリティ監査が行われた。時間の制約もあり、報告書は後日各グループ代表者が取りまとめ、館へ提出をすることとなった。多くの基礎的な面での欠陥を観察する結果となり、今後博物館のセキュリティ部門の改善にこの報告書が使用されることが望ましい。今後の年次大会は現時点では未定であるがポーランド、チェコでの開催が検討されている。

## 2) ICOM 京都大会の PR

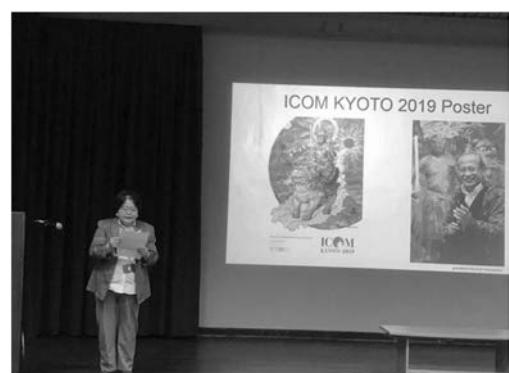
ビジネス・ミーティングで ICMS 会員向けに約 20 分間のプレゼンテーション「ICOM KYOTO 2019」を行った。内容は、ICOM 京都大会のテーマ・ロゴ等とその意味を解説し、日程・会場についての情報を提供し、最後に最新の大会 PR 用映像を上映した。更に、最終日のセッションでは ICMS 会員以外の本大会参加者に ICOM KYOTO 2019 を周知するために再度ビジネス・ミーティングと同様の PR 活動を行った。パンフレットとニュースレターは参加者全員の手元に配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

執行役員会に参加し、京都大会での ICMS のテーマの確認をしたところ、京都大会と同テーマの「Museum as Cultural Hubs – The Future of Tradition」で行うことに決まった。博物館界の一員として博物館セキュリティを ICOM 京都大会という大枠の中で考え、個別にテーマは設けないこととした。オフサイト・ミーティングの開催地について和歌山案は白紙、京都案と兵庫案から選定をすることを提案した。訪問先リスト・計画案を作成し執行部の承認により最終決定とする。また、京都大会での費用について日英通訳の必要性を疑問視する意見やスポンサーが付く可能性があるか質問があった。前者については、日本人参加予定者数を把握できないので不要かは難しい、後者については可能性はあるが現時点ではスポンサー企業は見つかっていないと回答した。京都大会で改選される執行役員に ICMS 会員の杉浦氏に立候補をお願いしたいと事務局長より話があった。会議参加者からの PR 映像への反応は非常に良かった。アフリカ諸国参加者からは査証の取り方やグラントの有無について質問があった。欧州の参加者からは宿泊先についてアクセスが良く設備の整ったホテルを紹介して欲しいと要望があった。



セッション内で自己紹介する様子



京都大会を PR する様子



ICMS 執行役員と ICOM ケニアとの集合写真



セキュリティ監査にて消火設備をチェックする様子

**23. ICOMAM**  
**International Committee of Museums and Collections of Arms and Military History**  
**武器・軍事史博物館国際委員会**

**参加者名 :**

遠藤 楽子（東京国立博物館）

**開催期日 :**

(9月28日-29日 : プレカンファレンス・ツアー)

9月30日 : リュブリヤナ市内・スロベニア国立博物館ツアー・理事会・開会式・レセプション

10月1日 : セッション（研究発表・意見交換）・ピウカ軍事史博物館公園ツアー・収蔵庫型展示ツアー

10月2日 : セッション（研究発表・意見交換）・総会・スロベニア現代史博物館ツアー・レセプション

(10月3日 : エクスカーション)

**実施場所 :**

スロベニア国立博物館・リュブリヤナ・スロベニア、ピウカ軍事史博物館公園・ピウカ・スロベニア

**今年度年次大会テーマ :**

War and Peace, Fear and Happiness（戦争と平和、恐怖と幸福）

**プログラムリンク :**

<http://network.icom.museum/icomam/conferences/icomam-2018-conference/>



開会式（スロベニア文化大臣による開会宣言）

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**



9月30日市内見学

今回は74人の参加登録があったが、ヨーロッパからは登録者63人（うちスロベニアから29人）、北米4人、アフリカ1人、アジア・太平洋からは6人であった。イエメンは国内情勢の悪化により不参加となり、委員会からのお見舞いメッセージが採択された。

本年は1918年の第一次世界大戦終結から100年にあたり、施設見学を含め、第一次大戦を中心とした近代軍事史に重点が置かれた大会となった。また、主催者からは、2014年から2018年の間に行われた記念行事についての情報提供の呼びかけがあった。プレカンファレンス・ツアーおよびエクスカーションでは、スロベニア国内の軍事関係史跡・施設を見学した模様。

9月30日は、スロベニア国立博物館学芸員によりリュブリヤナ市の史跡およびスロベニア国立博物館新館の武器展示についての説明を交えたツアーが行われた。同日夜の開会式典では主催者挨拶に加えスロベニア文化大臣による開会宣言があった。

10月1日には、第二会場となったピウカ軍事史博物館公園内の武器・戦闘車両・航空機等展示、スロベニアの歴史展示、および産業博物館収蔵庫型展示について、学芸員の案内による見学ツアーが行われた。収蔵庫型展示見学は午後のセッション前、軍事史博物館室内外展示見学は午後のセッション後に行われた。同日のセッションでは会場となったピウカ市長の歓迎挨拶に続き、ICOMスロベニア委員会会長および主催者挨拶、研究発表に進んだ。今年のテーマ War and Peace, Fear and Happiness

に基づき、アメリカ・フォートドラム博物館文化財センターからは米軍戦闘員教育における文化財保護教育の紹介があり、参考資料としてNATOまとめの文化財保護指針、米空軍制作のアフガニスタン駐留兵士向け文化財保護普及トランプが紹介された。このほか、ロシア中央軍事史博物館、当日会場のピウカ軍事史博物館公園、ツアーチのコパリッド博物館での取り組みについて研究発表が行われた。さらに、ポーランド・クラクフ国立博物館からは、戦争や戦士に関連した絵画表現にまつわる問題、イギリス国立軍事博物館からは収蔵品から見るイギリス軍による冷戦時代ドイツ駐留、また、イギリスの研究者からロケットの定義について発表があった。



セッション発表(10月2日)

10月2日のセッションは、テーマをPresentations of Museums: New Exhibitions – New Visions (博物館の視点:新しい展示、新しい見方) とし、発表が行われた。スロベニア国立博物館によるスロベニアおよび周辺の軍事史概要から始まり、スコットランド国立博物館からは1750年～1900年のイギリス軍によるインド・アフリカでの戦利品収集、プレカンファレンス・ツアーチのフラニヤ・パルチザン野戦病院(近年ヨーロッパ遺産に指定)による施設と沿革紹介、中国・抗日戦争記念博物館からは平和の礎としての戦争という視点からの同館問題意識の紹介、

フィンランド軍事博物館からは収蔵品を通したフィンランド軍の沿革紹介、クラクフ国立博物館からはポーランド・リトアニア連合国におけるユサールの表象について発表がされた。さらに、マルタ・宮殿武具館からは収蔵品を通したマルタ包囲戦の考察、2020年大会開催地であるトレド軍隊博物館からはフェルナンド2世とコルドバ将軍の暗号文解読についての発表、ベルギー・ブリュッセル戦争遺産研究所よりベビーブーム世代大量退職などを要因とした軍事史博物館における人材確保と知識・経験の継承の問題について、そして、クラクフ国立博物館の若手学芸員からヤタガン様式短刀の修復について事例報告があった。

同日午後は総会となり、理事会からの議事報告と採決、若手発表者への表彰(ヤタガン発表に対し)、プレカンファレンス・ツアーレポート、および、舞鶴プレ大会参加中の理事からの速報として2019年大会準備の経過報告があった。その後、学芸員による現代史博物館見学ツアーが行われた。

## 2) ICOM京都大会のPR

受付時の大会配布物とともに京都大会PRパンフレット、ニュースレター2号を配布。総会時に10分程度の時間をいただき、ビデオ・パワーポイントによる京都大会PR。オフサイト候補地彦根(特に彦根城博、井伊家)に関して補足説明した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

参加者に共通する懸念として、大会参加関連費用が高額になることが挙げられた。委員長からは、委員会予算から大会費用に充てられる分が少ないことが報告されたほか、委員会として年次大会においては見学旅行にとどまらず活発な研究交流が行われていることを自負しているとしたうえで、来年の京都大会においては、委員会の従来の活動方針に沿った研究交流が十分に行えるかどうかに対する不安があることが説明された。特に、日本でも武器・軍事史博物館の収蔵品の管理状況の視察(博物館収蔵庫見学など)を含めた充実したセッションにしたいという強い希望があるとのことである。そして、日本との物理的な距離もあって細かな交渉や調整を進めることが難しく、現状では京都大会組織委員会・準備室によって実施可能と示されたものを受け入れていくしかないという状況であることが総会で報告され、来年の京都大会に向けては依然として不安が残っていることが懸念された。



委員長より京都大会について説明

**24. ICOMON**  
**International Committee for Money and Banking Museums**  
**貨幣博物館国際委員会**

**参加者名 :**

川仁 央 (コインみゅーじあむ準備室)

**開催期日 :**

10月3日：参加受付と開会式

10月4日-5日：セッション発表と総会

10月6日：エクスカーション

**実施場所 :**

10月3日：貨幣博物館、10月4日：アクロポリス博物館、10月5日：考古学学会会館（すべてアテネ・ギリシャ）

**今年度年次大会テーマ :**

Future-proofing Numismatics in Museums: Issues of Conservation and Collection Management

（貨幣学の未来を保証する博物館——保存修復とコレクション管理の課題）

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

事前に用意された参加者名簿には108人の名前が記載されていたが、そのうち46人はギリシャからで、役所関係の職員など開会式のみの参加であろう人々も含まれている。また、大会自体にも博物館関係者ではないギリシャからの参加者が多く、ICOMON会員以外のギリシャの人々へ呼び掛けが行われたのではないかと思われる。同じギリシャ語圏で隣国のキプロスからも9人が参加していた。実際にセッション発表会場に参席していたのは50人強であったようだ。ギリシャとキプロス以外からは、ヨーロッパ22人、中東7人、アフリカ3人、アジア14人、南北アメリカ7人の参加であった。

初日は、夕方から参加受付の後、貨幣博物館の見学があり、その後に同館ホワイエで開会式が開催された。本会合はギリシャ大統領の後援を謳っており、文化・スポーツ省から多くの職員が参加していたようである。また、今回のICOMON会合は第25回目に当たり、その記念としてICOMONの初代委員長であり貨幣博物館の元館長である故マンド・エコノミデスの業績が称えられ、この記念的な趣旨で主催地にアテネの貨幣博物館が選ばれていた。スピーチは、貨幣博物館館長、ICOMON委員長、ICOMギリシャ委員長、ギリシャ中央銀行総裁、文化・スポーツ省副大臣、アメリカ貨幣学会会長（キーノート・スピーチ）の順に行われた。その後、音楽演奏とレセプションがあった。

セッション発表は、翌日から2日間に渡って行われ、1日目はアクロポリス博物館の講堂、2日目は考古学学会会館の講堂と、毎日場所が変わった。15分ずつ30人（組）の発表があり、上記のメイン・テーマのもと、6つのサブテーマに分けて発表が行われた。サブテーマは、①Numismatic Collection Management: International Perspectives（貨幣コレクション管理——国際的視点）、②The Future is Digital（未来はデジタル）、③Numismatic Collections as Pedagogy（教育活動としての貨幣コレクション）、④Numismatic Collection Management: International Perspectives II（貨幣コレクション管理——国際的視点II）、⑤Bank Museum Practices（銀行博物館の実践）、⑥Conservation in Focus（保存修復に焦点を当てて）、⑦Professional and Institutional Practices（専門職と組織の実践）である。具体的な博物館活動や貨幣学的な研究対象についての発表が多かったが、個人的には、25年前のICOMON創設の経緯や、この25年間の世界の貨幣博物館の趨勢などについての発表やスピーチを興味深く聞いた。個別の博物館の状

況報告としては、ICOM 本部からの助成を受け参加したバングラディッシュ国立博物館の職員の発表が興味深かった。ギリシャ語による発表にはヘッドセットを使った同時通訳がついた。セッション発表最終日には、総会が開催された。

会合 2 日目の夕刻にはアクロポリス博物館の見学、3 日目の昼にはギリシャ中央銀行博物館の見学があった。4 日目はエクスカーションで、チャーターバスで移動し、ラブリオの古代採鉱場跡と近代産業遺産の採鉱施設跡の見学、そしてスニオン岬のポセイドン神殿の見学をした。すべての見学先でガイドの解説があった。

## 2) ICOM 京都大会の PR

総会の前に 10 分間のプレゼン時間をもらった。京都大会のリーフレットを持って行けなかつたため、貨幣博物館で pdf から印刷させてもらったものを配布した。3 分間ビデオを流し、残りの時間は、自分で作成したパワーポイントを使って、京都大会内で予定している ICOMON のオフサイト・ミーティングについてプレゼンした。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

今回の総会で ICOMON 京都年次大会のテーマを提案した（決定は、後日ということになった）。オフサイト・ミーティングでは、造幣博物館（大阪）、尼信会館（尼崎）、黒川古文化研究所（西宮）の 3ヶ所を訪問する予定である（すべての機関と ICOMON ボードから了承を得ている）。現在、参加者 40～60 人を見込み、そのためのバスのチャーター料金とランチの費用の見積もりを積算し、協賛金を募って、貨幣関係の出版社と販売業者の複数社から寄付金を受け、すべてを協賛金（寄付金）で賄える金額が集まっている。実施方法として、小型バス複数台のチャーターを予定しており、英語話者である「同伴者」登録者に引率の手伝いをしてもらう予定である。また、セッション発表の枠内で、京都在住の研究者を招いて古銭の拓本採りのワークショップを企画している（ICOMON ボードの賛同を得ているが、手続きについては京都大会事務局と相談中）。



メイン会場となったアテネ貨幣博物館



アクロポリス博物館講堂でのセッション発表



ギリシャ中央銀行博物館の見学



ラブリオの古代採鉱場跡へのエクスカーション

**25. ICR**  
**International Committee for Regional Museums**  
**地方博物館国際委員会**

**参加者名 :**

五月女 賢司 (吹田市立博物館)

**開催期日 :**

11月5日 : 基調講演、セッション発表 (テーマ : Toi o Tamaki Regional museums, challenges and training)  
11月6日 : 基調講演、セッション発表、総会 (テーマ : Training, practice and changing nature of curatorship)  
11月7日 : セッション発表、博物館見学 (テーマ : Realities in regional museums - issues 'showcase')  
11月8日 : セッション発表、博物館見学 (テーマ : Challenges of "presenting difficult issues")  
11月9日 : 基調講演、セッション発表、プレナリーセッション (テーマ : Regional resources: collections, community relationships and training)

**実施場所 :**

11月5日 : Auckland Art Gallery • オークランド・ニュージーランド  
11月6日 : Old Government House, University of Auckland • オークランド・ニュージーランド  
11月7日 : Waikato Museum Te Whare Taonga o Waikato and Taupo Museum • ハミルトン・ニュージーランド  
11月8日 : National Army Museum, Te Manawa and Te Awahou Nieuwe Stroom • ワイオウル・ニュージーランド  
11月9日 : Museum of New Zealand Te Papa Tongarewa • ウェリントン・ニュージーランド

**今年度年次大会テーマ :**

Facing the new political realities: Rethinking training for regional museums (新しい政治的現実への直面 : 地域博物館のための人材育成について再考する)

**プログラムリンク :**

<https://www.icr2018ictop.com/conference-programme-28-october.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

11月5日から9日まで、ニュージーランドで ICR&ICTOP 合同年次大会が開催された。11月5日にオークランドでスタートし、バスでウェリントンに移動する途中に様々な会場を巡り、セッションや見学、総会などが11月9日まで開催されていった。

ICR では普段、地域博物館のあり方全般についての議論をしているが、今回は ICTOP との合同年次大会ということで「人材育成」という切り口が加わったため、より明確な問題意識に基づいた議論ができた。また、ポストカンファレンスでは、ニュージーランドの大学の博物館学課程について学んだ。

内容としては、地方博物館が現在及び将来に直面する、より広い範囲での活動環境のあり方といった問題を検討した。また、さまざまな発表者が、地域博物館のスタッフが新たな課題に対処するための準備に際する人材育成戦略についても検討した。地方博物館の議論と専門人材の育成やサポートに関する議論を組み合わせることで、活発な議論と意義ある経験と知識の共有ができた。ICR と ICTOP という国際的なミュージアムコミュニティとニュージーランドにおける二文化主義に基づく博物館での活発な活動に携わる人々とが交流・共有する機会として大変貴重であった。

## 2) ICOM 京都大会の PR

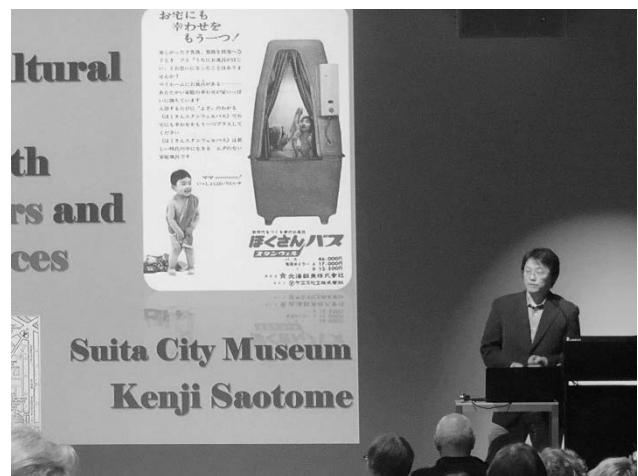
合同セッション時に10分間程度のプレゼン時間をいただき、ICTOPの江水氏とともにパンフレットを配付し、説明及び質疑応答を行った。

### 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

ICR ボードミーティングでは、翌年に控えた京都大会の計画案を示し、大枠について承認された。このほかボードミーティングでは、詳細な内容の決定時期、Call for Paper 等に関連し要旨や Full Paper の締切日、オフサイトミーティングの内容やロジスティックス、募集時期、ICR 独自の宿泊場所等について議論した。9月5日のオフサイトミーティングにはICTOPも関心を示したため、ICTOPのボードとICRのボードの合同ミーティングも開催し議論した。その結果、ICTOPは独自のプログラムを開催しつつ、ICRのプログラムにもメンバーが参加できるようにすることとした。



## 開会式の様子(ICR 委員長による趣旨説明)



## セッション発表の様子



## エクスカーションでの博物館見学の様子



## プレナリーセッションの様子

**26. ICTOP**  
**International Committee for the Training of Personnel**  
**人材育成国際委員会**

**参加者名 :**

井上由佳（文教大学）、江水是仁（東海大学）

**開催期日 :**

11月5日-9日：年次大会（セッション発表、レセプションと総会、エクスカーション）

**実施場所 :**

オークランド美術館、オークランド大学、オークランド・ニュージーランド

ワイカト博物館、ハミルトン・ニュージーランド

国立軍隊博物館、ワイオウル・ニュージーランド

ニュージーランド国立博物館、ウェリントン・ニュージーランド

**今年度年次大会テーマ :**

Facing the New Political Realities: Rethinking Training for Regional Museums

**プログラムリンク :**

<https://www.icr2018ictop.com/conference-programme-28-october.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容（1000字程度）**

今回の会議には96名の参加者があった。ヨーロッパ圏が15名、東アジア圏8名（日本4名、台湾3名、中国1名）、米国4名、その他の大半は主催国のニュージーランド（以下、NZと略す）とオーストラリア（3名）といったオセアニアからの参加者があった。

11月5日の大会一日目はAuckland Art Galleryの講堂においてRegional museums, challenges and trainingというテーマで開催された。キースピーカーのクロアチア国立民族学博物館館長のGorana Horjan氏から、自国政府とEUからの様々な助成制度等の支援を獲得している現況とそれらから課せられている基準をクリアすることの厳しさについて講演があった。EUのような枠組みのない私たちには新鮮な内容であった。午後のセッションでは、NZ、オーストラリア、フィンランド、エストニア、日本（五月女氏、吹田市博物館）、トルコ、そしてイギリスから都市博物館の活用事例について発表があった。NZではBicultural Societyを目指しており、博物館のマオリ文化の理解と普及と保存に役立てていることが紹介された。それぞれの国々で地域と市民を巻き込んだ事業が推進されている様子を知ることができた。

11月6日の大会二日目はOld Government House, University of Aucklandを会場に開かれた。キースピーカーはオーストラリアの歴史家で展示コンサルタントのSue Hedges氏であった。歴史・産業遺産や負の遺産とされるものをいかに保存し地域資源としていかにしていくかについて、その意義と課題について話されていた。日本の戦争犯罪についても触れていたことが印象的であった。その後、日本（井上、文教大学）から「大学を基盤とした日本の学芸員養成制度」と題し、70年近くに渡って運用してきたこの制度の特徴とメリット・デメリットについて発表があった。その後、NZ、台湾からの発表が続いた。台湾における市民学芸員養成の制度は興味深く、正規の雇用に結びつかない事態は日本と共通する課題であった。続いて午後には、デンマーク、中国、NZからの事例が発表され、さらに休憩をはさみ、日本（江水、東海大学）から、「日本における博物館実習生を受け入れる博物館園の特徴と博物館実習の課題」について、法的に博物館ではない博物館でも実習生を受け入れていること、学芸員資格を持たない職員も実習生に対する指導を行っているなど発表があった。その後 NZからの事例発表が続

いた。有給インターンシップを経験してキャリアを積んでいる現役若手インターンからの発表もあり、狭き門とされる NZ における博物館での人材育成の姿を垣間見ることができた。

その後、7~8 日にかけて NZ 北島をバスで巡り、午前中は発表、午後は施設見学という形で大会は進んでいったが、文字数の関係で日本人の発表したセッション以降の詳細の記述は割愛する。

## 2) ICOM 京都大会の PR

11月6日午後2時30分より、京都大会PR用のパワーポイントと映像を使って、約15分間のプレゼンテーションを行った。あわせてパンフレットを配布し、説明及び質疑応答を行った。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

参加者からは主だって質問などはなかったが、ICTOP 理事会において、2019年9月5日開催予定のオフサイトミーティングについての質疑があった。当初は ICR と合同でオフサイトミーティングを予定したが、Darko Babic 会長より、ICR の案では盛りだくさんの内容であり、ICTOP 独自でオフサイトミーティングを企画してほしいとの要望があった。帰国後、その要望を受けて、京都造形芸術大学で展開される学芸員養成課程の実態を把握するための視察と、京都ならではの博物館活動が展開される、国際マンガミュージアムを視察する案を提案し、同氏より承諾を得られた。現在、江水が京都造形芸術大学および国際マンガミュージアムと交渉しており、視察を引き受けただけの内諾が得られた。移動手段は公共交通機関でまかない、昼食は国立民族学博物館初代館長、梅棹忠夫氏のご子息である梅棹マヤオ氏が経営される、rondokreanto で対応いただけの予定である。



井上氏の発表・質疑応答



江水氏の発表



京都大会の PR



最終日・全体セッションの様子

**28. MPR**  
**Marketing and Public Relations**  
**マーケティング・交流国際委員会**

**参加者名 :**

関谷 泰弘 (ICOM 京都大会準備室)

**開催期日 :**

10月8日：登録・レセプション（昼：ポートツアーノルマニス）

10月9～10日：年次大会（セッション発表、レセプションと総会）

10月11日：エクスカーション

**実施場所 :**

シカゴ科学技術博物館・シカゴ・アメリカ

**今年度年次大会テーマ :**

Communicating with Heart: Putting People at the Center

（心のこもったコミュニケーション：来館者中心のミュージアム）

**プログラムリンク :**

[http://network.icom.museum/fileadmin/user\\_upload/minisites/mpr/ICOM\\_2018\\_detailed\\_schedule.pdf](http://network.icom.museum/fileadmin/user_upload/minisites/mpr/ICOM_2018_detailed_schedule.pdf)

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

2018年のMPRの年次大会は、よくも悪くも京都大会の運営に参考になるものとなった。まず、登録が7月開始と事前にアナウンスされていたが、実際は開会の2週間前までオープンせず、案内もなかったため、状況がわからなかった。提携ホテルがどこも高すぎて泊まれなかつたため、事前に個人的にホテルを予約したが、会場の発表が直前となり、予約したホテルが会場から遠く、移動に苦労した。すべての移動の起点が提携ホテルの一つになっていたが、そのような連絡も直前までなかつた。さらに、発表者の決定後、発表者に連絡がなく、ウェブに公開されたスケジュール上は持ち時間30分だったが、実際に当日配布された資料を見ると20分だった。また、10月8日のポートツアーノルマニスは、シカゴマラソンとスケジュールが重なっていることから事務局より8日のシカゴ入りが推奨されていたため、参加できなかつたが、ポートツアーノルマニスの実施自体が直前までアナウンスされておらず、航空券手配後にわかつたため、対応はできなかつた。

以上のように、今回の年次大会は運営に問題が散見されたが、その影響か、大会の出席者は30人ほどで、例年に比べると非常に少なかつた。特にアメリカ国内からの出席者が5人程度で、宣伝活動が適切に行われていたのか疑問である。

ただ、大会自体は非常に有意義なものであった。10月9、10日にシカゴ科学技術博物館で開催された大会のテーマは、「Communicating with Heart: Putting People at the Center（心のこもったコミュニケーション：来館者中心のミュージアム）」で、コミュニケーションを中心とし、ミュージアムにおけるマーケティングの役割や多様性、ミュージアムの可能性についての基調講演やディスカッションが行われた。9日はICOMのエグゼクティブ・ボードでもあるアドバイザーのキャロル・スコット氏より民営、官営など様々な運営方法の例示とともに、ミュージアムの運営の持続可能性について発表があつた。10日の基調講演はコロンビアのアンドレス・ロルダン氏による科学館が地域の再開発の核となつてゐる事例からミュージアムの地域における可能性についてであつた。そのほかには公募に基づく研究発

表や地域の広報担当者によるパネルディスカッションなどが実施された。

エクスカーションはシカゴ市内の有名ミュージアムをバスでめぐって、館内は自由観覧という簡単なものではあったが、レセプションがミュージアムの展示室内で行われるなど特別なものだったため、全体としては満足のいくものとなっていた。

## 2) ICOM 京都大会の PR

10分間の京都大会 PR のプレゼンを行い、同時にパンフレットを配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

現在、オフサイトミーティングの会場選定を行っているところで、ボードミーティングで方針が検討された。今後は筆者の事前の提案をもとに、検討中の館へのアプローチを行い、その結果を見てボードメンバーで再検討を行うこととなった。基本的には京都市内での活動を考えている。そのほかには、研究発表のスケジュールや来年のテーマについても検討が進んでおり、順調に準備が進められていると言える。今後は、オフサイトミーティングと8月31日夜のボードミーティングの会場手配を筆者が行うことになっており、会期中も業務が発生することから、会期中の業務を手伝ってもらえる協力者が必要だと考えている。



開会式の様子



集合写真



京都大会を PR する様子



レセプションの様子(シェッド水族館)

**29. NATHIST**  
**International Committee for Museums and Collections of Natural History**  
**自然史の博物館・コレクション国際委員会**

**参加者名 :**

亀井修、矢部淳（国立科学博物館） 佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

**開催期日 :**

11月3-4日 ボードミーティング、ワーキンググループミーティング

11月5-8日 開会挨拶、基調講演、セッション、AGM、ディナーなど Social activity、博物館視察

11月9日 エクスカーション

**実施場所 :**

Steinhardt Museum of Natural History, Tel-Aviv University Tel Aviv-Yafo, Israel.

Man and the Living World Museum, Ramat-Gan, Israel.

National collections at Hebrew University, Jerusalem, Israel. ほか

Hotel NY Tel Aviv, Tel-Aviv, Israel. (ボードミーティング)

**今年度年次大会テーマ :**

Natural History Museums in Time and Place (時間と空間のなかでの自然史博物館)

**リンク :**

<https://nathist.forms-wizard.net/>    <https://icomnathist.wordpress.com/>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

NATHIST2018年会は、11月5日から8日まで、イスラエル、テルアビブ・ヤフォ市、テルアビブ大学、シュタインハート自然史博物館を主会場にして、イスラエル内のいくつかの異なる博物館で、テーマの「時間と空間の自然史博物館」のもとに、基調講演と一般講演が行われ、世界の自然史博物館の現状やそれが果たす役割、自然史資料の保存や環境問題などさまざまな事項についての知見の共有と論議が行われた。

テルアビブ地区及びエルサレム地区等の博物館等複数の場所を訪れ、プログラムの体験や意見交換を行った。前半はテルアビブのシュタインハート自然史博物館とラマットガンのマンアンドザリビングワールド博物館など、後半はヘブライ大学の「ナショナル・ナチュラル・コレクション」、イスラエル博物館、ブルームフィールド・サイエンス・ミュージアムなど、新しい博物館プロジェクトが行われている博物館の視察をした。

エクスカーションでは、マサダ遺跡、死海及び乾燥地域等を巡見し、人工物を含む地域の自然や歴史に関する理解を含めた

ボードミーティングでは、来年度の ICOM 京都大会 2019 に向けての情報の共有と論点整理を行った。

**2) ICOM 京都大会の PR**

パンフレットを配布するとともに、AGM でビデオの上映、案内、及び進捗状況のプレゼンを行った。

**3) 京都大会に向けての準備と進捗状況**

ボードミーティングで、基本的事項（セッション、キーノートスピーチ、コールフォーペーパ、オフサイトミーティング、エクスカーション等）の方向性について調整と共有を行った。

- ・Call for Paper や HP は開催国が行う（通例）
- ・NATHIST の予算から、学生 1 名への渡航支援を計上
- ・英語と日本語の通訳は必要。NATHIST の予算から通訳経費の一部として€4,500 を計上
- ・ICOM 会員以外の発表も受け付けるが、ただし、会員を増やすように努力
- ・セッション：Engagement, Collection, Exhibition, Disaster management/Resilience, Culture and Museum, Citizen Science / Social inclusion
- ・9月 1 日ボードミーティングの予定時間が短い。前日実施か？

これからも発生する課題や要望等については、全体運営を見渡しながら、逐次検討と対応を進めるとした。

- ・近くのホテルを確保したい（委員長・ドーフマン氏から）
- ・「世界遺産・西芳寺・苔寺」視察したい（前委員長・ウインター氏から）（全体エクスカーションの中に含まれるか？）



写真1 AGM の様子

Man and the Living World Museum Ramat-Gan



写真2 施設見学の様子

Steinhardt Museum of Natural History



写真3 教育プログラム体験の様子

National collections at the Hebrew University



写真4 巡覧の様子

エルサレム当方の乾燥地帯

**30. UMAC**  
**International Committee for the University Museums and Collections**  
**大学博物館とコレクションの国際委員会**

**参加者 :**

福野 明子 (国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館)

**開催期日 :**

6月 21-24 日 : 年次大会 (プレカンファレンス・エクスカーション、セッション発表、総会、ボードミーティングなど)

**実施場所 :**

アメリカ・フロリダ州のマイアミ大学およびLOWE Museum

**今年度年次大会テーマ:** Audacious Ideas: University Museums and Collections as Change-Agents for a Better World (大胆な発想: よりよい世界に向けたチェンジエージェントとしての大学博物館とコレクション)  
プログラムリンク : <http://umac.icom.museum/wp-content/uploads/2018/02/2018-program.pdf>

**年次大会概要及び参加所見 :**

**1) 年次大会のテーマと内容**

UMAC (大学博物館とコレクションの国際委員会) の 2018 年度大会は、Association of Academic Museums and Galleries (AAMG)と合同でのマイアミ大学と LOWE Museum で開催され、参加者数は 380 人。AAMG は 1980 年に設立された全米の大学博物館・美術館の専門家を中心に 1,000 人以上がメンバーとなっている組織であり、参加者数から、年次大会への期待が高いことが伺えた。なお、AAMG 会員ではない UMAC 会員の参加は 50 人ほどであった。

大会テーマの「チェンジエージェント」だが、本来「チェンジエージェント」とは、企業などの組織において変革や開発を促進する者を指すが、これを大学博物館にあてはめた、いかにもアメリカ的なテーマ設定であった。具体的には、大学におけるティーチングモデルの試み、キャンパス内外での公平性とインクルージョンの戦略、国を超えたコラボレーションや取り組みが具体的なテーマとされた。大学博物館が、地域で、国レベルで、そして国際的に、チェンジエージェントとしての機能を果たすための発想や試みについて話し合うため、様々なセッションが企画され、活発な討論が行われた。

21 日の午前中は、ワークショップ (Bootcamp for Academic Museums) が 2017 年の UMAC ヘルシンキ大会と同様の内容で行われた (参加は任意、参加費も大会参加費とは別)。午後は、UMAC のボードミーティングがマイアミ大学内 LOWE Museum の会議室で開催され、夜は同じく LOWE Museum のエントランスホールと特別展会場にてレセプションが開かれた。

22 日～23 日は、UMAC 、AAMG 両会長のオープニングで始まった。参加者数、発表者数も多かつたため、その後は、大会場から 2～3 の中小規模の会場に分かれてパラレルセッションが行われ、参加者は、興味のあるセッションに移動。会場の外のフォイヤーではパネルが設置され、作成者はその前で、質問を受けていた。大学博物館は多種多様であり、コレクション、館種も様々である。参加者数も多く、積極的な会員が多いということもあり、興味の対象もそれだけ多くなる。その受け皿となるために、大会のテーマは広く設定され、どのようにも解釈し、それぞれの事例に当てはめができるように考えられていた (詳細はプログラムを参照)。なお 24 日は、ポストカンファレンスワークショップが別会場にて開催された (参加は任意、参加費も大会参加費とは別)。

## 2) ICOM 京都大会の PR

ボードメンバーが手作りのポスターを掲示、京都大会パンフレットとニュースレターを会場で配布した。

## 3) 京都大会に向けての準備と進捗状況

大会前より、UMAC のマルタ委員長から京都大会に向けてのミーティングを開催したいという依頼があった。そのため、前年度のヘルシンキ、また今マイアミ大会にも参加する日本人 UMAC メンバーに事前に連絡をとり、京都大会に向けての協力を要請。マイアミ大会期間中に Local Organizing Committee (LOC、現地実行委員会) を立ち上げることとした。日本から参加したメンバーは、UMAC のボードメンバーでもある筆者、栗原祐司氏 (ICOM 京都大会運営委員長) はじめ、南博史氏 (京都外国语大学)、寺田鮎美氏 (インターメディアテク、東京大学総合研究博物館)、白岩志康氏 (セントラル・オクラホマ大学)、本間友氏 (慶應義塾大学アート・センター) であった。

6月23日にマルタ氏の招集により、副委員長のバーバラ氏、書記のマルコス氏と LOC メンバーが集まった。そこで、ICOM 京都大会に向けた具体的な打ち合わせが行われ、正式に LOC の発足となつた。LOC の委員長は Co-Chairs という形で南氏と福野がその任を引き受けことになった。LOC の役割としてプログラム検討委員会 (Program Committee) があるが、このミーティングに集まったメンバー（および後日、自然史系の内容にも対応できるよう加わっていただいた北里洋氏）が力を合わせて対応することに。より早く情報共有ができるよう、メンバー全員で WhatsApp のグループ登録がなされた。なお、栗原氏にはアドバイザーという形で LOC に助言していただくこととなった。その後、UMAC 京都大会のテーマを“University Museums and Collections as Cultural Hubs: The Future of Tradition”に決定（テーマはすでに UMAC ウェブサイトに掲載されている）。京都大会での UMAC のスケジュール確認がされ、今後は ICTOP との Joint Session を含め、具体的な内容も検討していくことを確認。また、出来るだけ多くの参加を促すため、大会に向けて、早めに Call for Papers を出すこと、またプログラムを決定し、発表者には Early Bird 料金で大会参加を可能とするように配慮したスケジュールをたてることとなった。



右に会場となったマイアミ大学のシャララ・ステューデントセンター



UMAC-AAMG 合同大会の全体セッション



京都大会をふくめ UMAC の年次大会の予定を説明する  
マルタ UMAC 委員長



マイアミで発足した京都大会 LOC メンバー



**ICOM 国際委員会年次大会報告書  
2018 年度**

発行：2019 年 3 月 7 日

編集：ICOM 日本委員会

〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-52

日本博物館協会内

印刷：株式会社ワイス



国際博物館会議 京都大会



日本のミュージアムのための国際発信力向上推進事業実行委員会



本印刷物は、平成 30 年度文化芸術振興費補助金「地域と協働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の支援を受けて作成しました。